

アイルランド演劇を掘り起こす(5)

——ラザフォード・メインの7戯曲

河野賢司

はじめに

日本生まれで日本育ちのアイルランド劇作家という特異な経歴を持つラザフォード・メインに関しては、すでにいくつかの先行研究が存在しており、筆者がこの作家を初めて「掘り起こす」訳ではけっしてない。しかしながら、メインの作品では初期の数編がよく知られているものの、中期・後期を含めた全体像はあまり紹介されているとは言えないのが実情である。拙論はそれを補うとともに、前号で論じたマクナマラと合わせて、アルスター文芸劇場の活動を追跡することを企図している。

(I) 劇作家略歴

ラザフォード・メイン¹ (Rutherford Mayne), 本名サミュエル・ジョン・ウドゥル (Samuel John Waddell, 1878-1967) は1878 (明治10) 年, アイルランド人の両親のもと, 東京の築地に生まれた。父親のヒュー (Hugh)・ウドゥルはアントリム州グレナーム出身, 母親ジェイン (Jane)・ウドゥル (旧姓マーティン) はタリーアレン出身であった。ヒューはベルファーストのクイーンズ大学を卒業後, 長老派宣教師として中国やスペインで布教活動に従事し, 1873年にキリスト教が合法化された後, 日本へ宣教に訪れた。夫妻には10人の子ども (8男2女) が生まれ, サミュエルは4番目の子であった。1892年, 東京でその当時猛威をふるったチフス熱にジェインは罹患し, 治療のために子どもたちとともにベルファーストに戻るが, まもなく他界する。(したがって, 母と同行したサミュエルの日本滞在は14歳で終わりとなる。) 翌1893年にヒューは従姉妹のマーサ (Martha) と再婚し, サミュエルを含む年長の6人の子どもたちはベルファーストに留まらせ, マーサと幼い4人の子どもたちとともに, 再び東京での職務を任期の1900年まで務めあげたのちヒューはベルファーストに帰るが, 翌年に亡くなっている。

ベルファーストに移ったサミュエルは Royal Belfast Academical Institution, クイーンズ大学, 王立アイルランド大学 (Royal University of Ireland) で工学を学んで, 29歳の1907年に卒業している。遡って1904年にはアルスター文芸劇場の設立に貢献し, 処女作『道の曲がり角』は1906年に上演され, 1908年には代表作『のらくら者』がダブリンのアビー劇場で上演されている。

彼は役者としても活躍し、ユージン・オニール (Eugene O'Neill, 1888-1953) の『皇帝ジョウズ』 (*The Emperor Jones*, 1920) では主役を演じ²好評を博した。1909年に採用され1950年に退職するまで、アイルランド土地収用委員会 (Irish Land Commission) に勤務し、退職時は監査委員長 (Chief Inspector) の要職にあった。工学部出身で土地関係の職務にあったことは彼の劇作に大いに影響を与えている。82歳の1960年にはベルファーストのリリック劇場 (Lyric Players Theatre) の理事に就任している。1910年、詩人ジョウゼフ・キャンベル (Joseph Campbell, 1879-1944) の妹 (姉?) でカトリック教徒のジョウゼフィーン・キャンベル³ (Josephine Campbell) と宗派をこえて結婚し、1967年2月25日ダブリン州のドーキーで亡くなっている。

(II) ラザフォード・メインの演劇作品

メインの筆になる戯曲としては以下の表のように12作品が確認されているが、そのうち筆者がテキストを入手できたのは7作品に限られる。初演順に詳しい粗筋と論評を付すことにする。

	邦題 (拙訳)	原題	初演日	初演会場
①	『道の曲がり角』	<i>The Turn of the Road</i>	1906. 12. 4	Examination Hall of the Queen's University, Belfast
②	『のらくら者』	<i>The Drone</i>	1908. 4. 24	Abbey Theatre, Dublin
③	『誓約』	<i>The Troth</i>	1908. 10. 31	Crown Theatre, London
④	『頓馬』*	<i>The Gomeril</i>	1909. 4. 29	Large Concert Hall, Dublin
⑤	『万軍の将』*	<i>Captain of the Hosts</i>	1910. 3. 8	Grand Opera House, Belfast
⑥	『赤い泥炭』	<i>Red Turf</i>	1911. 12. 5	Grand Opera House, Belfast
⑦	『もし仮に!』*	<i>If!</i>	1913. 11. 25	Grand Opera House, Belfast
⑧	『黄昏』*	<i>Evening</i>	1914. 3. 2	Grand Opera House, Belfast
⑨	『工業』*	<i>Industry</i>	1917. 12. 6	Grand Opera House, Belfast
⑩	『幻影』	<i>Phantoms</i>	1923. 11. 28	Gaiety Theatre, Dublin
⑪	『ピーター』	<i>Peter</i>	1930. 1. 28	Abbey Theatre, Dublin
⑫	『橋頭堡』	<i>Bridge Head</i>	1934. 6. 18	Abbey Theatre, Dublin

*を施した作品はテキスト未入手。

①『道の曲がり角』 (*The Turn of the Road*) 2場とエピローグ

初演記録は、1906年12月4日、ベルファーストのクイーンズ大学の試験講堂においてアルスター文芸劇場によって私上演され、12月17日から19日にベルファーストのアルスター・マイナー・ホールにおいて公に上演された。メインはサミュエル役で、またマクナマラはジョン役で出演し、演出はフレッド・モロウが担当した。

時は現在 (1906年) で、1場と2場の間に1ヶ月が経過する。場面は全編を通して、北アイルランドのダウン州にあるグラナハン家の台所。

第1場 7月の夕方8時ごろ、夕食後、グラナハン夫人 (Mrs Mary Granahan) は娘のエレン (Ellen) と皿

洗い、祖父トマス (Thomas Granahan) は粥を食べ終えて暖炉のそばに座っている。奥の部屋からは次男のロビー (Robbie John) が奏でるフィドルの調べが聞こえてくる。祖父やエレンは演奏に好意的だが、夫人は、家畜の世話もせずに音楽三昧の次男坊を苦々しく思っており、ロビーを呼び寄せて、牝牛が近所のオーラ・ボイド (Aura Boyd) の小麦畑に侵入しないように見張るように言いつける。ロビーは仕方なく従い、出て行く。

夫人は仔馬や脱脂乳を売りに市へ出かけた夫ウィリアム (William John) や長男サミュエル (Samuel John) の帰宅が遅いのを心配し、悪徳商人に酒でも飲ませられて言いように操られているのではと気を揉むが、ロビーよりも6倍も勤勉で立派な長男がついているから大丈夫だと思いなおす。野菜畑にいつもの雌豚が侵入しているのを発見して夫人は飛び出す。

ロビーが戻り、絶えず両親から用事を言いつけられてフィドルの邪魔をされるとこぼし、祖父とエレンは慰める。夫人が戻り、ウィリアムたちの荷車が見えるから、父親の機嫌を損ねないように、少なくともいまはフィドル練習を控えるようにロビンに命じて、慌しく鶏舎の方へ出て行く。

まず長男のサミュエルが少し酔った様子で登場し、仔馬が30ポンドの高値で騎兵に売れたと上機嫌に語っていると、父親のウィリアムも帰宅。帰路に出会ったというフィドル弾きの浮浪者を連れてくる。フィドルに現を抜かすとどんな運命が待ち受けているかの生きた教訓にしようという狙いである。祖父やエレンは不快感を示すが、浮浪者は、かつては「青きボヘミア管弦楽団」(Blue Bohemian Wind and String Band) の指導者で欧州諸王の御前で演奏したこともある、と自慢し、道中演奏してきたバラッド曲を披露する。妻が鶏舎にいと聞いて安心したウィリアムはボーカル役をつとめ、他の者も口ずさんだりする。

戸が開き、夫人が入ってきて驚き、浮浪者を追い出そうとする。ロビンは浮浪者の肩をたたいて小銭を恵む。まっとうな職に就くことをサミュエルが勧めると、200年前の由緒ある名器クレモナ⁴ (Cremona) を捨てるくらいなら、冥府を彷徨う方がましだ、と彼は言い放ち、涙ぐんで立ち去る。

夫人が止めるのも無視して、ロビンは浮浪者の後を追って出て行く。ウィリアムは仔馬が30ポンドで売れた話を自慢するが、夫人の態度は素っ気なく、むしろ酒代に2シリング1ペニー使ったことを不快がる。サミュエルが、より高値をはったりで挙げていた男の話を持ち出すと、ウィリアムは怒って彼をぶっとばそうとする。夫婦は退場するが、なおも口論の音が聞こえる。

25ポンドで売れたと言っておけばよいのに、と父親のバカ正直ぶりをサミュエルは笑う。戻ってきたロビーに、浮浪者を連れてきたのは自分の発案だったと明かし、祖父やエレンは、やはりそうか、と納得する。サミュエルは、市で見かけた娘ジェニー・グレイム (Jenny Graeme) が資産家の息子マクドネル (M'Donnell) に送ってもらっていたと、冷やかしかげにロビーに伝え、フィドル演奏か実家の農業を継ぐかのどちらかを選択すべきだと諭す。エレンも、ロビーがニューカースルの音楽大会で賞金3ポンドを獲得したのは立派だけれど、ジェニーの父親がフィドル奏者との結婚を許すかどうか、あるいはジェニー本人も結婚したがるか、どうかは疑問だと漏らす。祖父もまた、名演奏家になれる可能性は低いし、ウィリアムの援助も期待できないのだから音楽を諦めるように諭し、ロビーと退場。

砂糖の値上げなどでやりくりが大変なのよ、と夫人がウィリアムとまだもめながら登場。30ポンドのうち1ポンドを小遣いに得ようと必死に頑張る夫を牽制している。すると、サミュエルは、エレンが注文していたお茶会の服 (tay gown) が出来たという伝言をわざとその場で伝え、お前たちは贅沢しながら一家の主がタバコにも事欠く有様で、なにがやりくり算段だ、とウィリアムは怒り出す。夫人とエレンはウィリアムの怒りがおさまるまで、別室に下がる。

サミュエルの助け舟で形勢逆転したことを感謝するウィリアムに、彼はその礼として12シリング (すなわち1ポンドの6割に相当する額) を要求する。ウィリアムはもちろん渋るが、ついには折れて、10マイルも歩いて行商した挙句、手元に残るのは8シリングだけか、と嘆く。明日の干草作業機械のために自在スパナを借りてウィリアムスン (Courdy Williamson) の所へ行こうとするサミュエルに、目当ては昨日も会っていたその家の娘か、とウィリアムは尋ね、サミュエルが干草仕事なら、ロビンがああ調子だから、家畜の世話を自分がひとりではせねばならない、と不満をもらす。そして、いろいろと思案したが、そろそろロビンに将来の決断を迫る潮時だと判断し、フィドルを焼き捨てないなら勘当を言い渡すつもりだ、と打ち明ける。呼ばれた夫人もそ

れに賛同し、ロビーが祖父に付添われて登場。

ウィリアムは、フィドルのせいで、ロビンには朝寝坊や怠け癖がついており、さっき連れてきた浮浪者のような人生の末路を迎えることになる、と説教するが、それは事実誤認だし、浮浪者が身を持ち崩したのはむしろ酒のせいだ、とロビンは反論する。ウィリアムは、フィドルを蛇のように踏みつけてやると脅したり、ロビンに多額の遺産を残す遺言状を作成している、と宥めたり、硬軟両方の態度でロビンに向かう。音楽大会で演奏を高く評価する審査員がいたとサミュエルが口を滑らせると、そんなことは当てにならない、とすかさず祖父も横槍を入れる。ジェニー・グレイムとの将来のことを考えてフィドルを捨てるように促すウィリアムの声に、ためらいののち、ロビンはフィドルを暖炉の火中に投じる。幕。

第2場 第1場と同じく台所。エレンと夫人が暖炉の傍に座って、ジェニーの父親ジョン (John Graeme) がやがて訪ねてくることを噂する。娘の結婚相手ロビンがどれだけの財産をもつことになるかをウィリアムと直に相談するためである。ロビンがジェニーから熱愛されていることを羨むエレンに、夫人は、ジョンの禁酒講演会の帰りにエレンを家まで送ってくれたトム・テイラー (Tom Taylor) がまもなく来訪の予定であることを知らせる。

戸にノックがあり、バター・チーズ製造所経営者のテイラーが登場。夫人はテイラーを娘エレンの結婚相手に考えており、意中の女性はいないか、事業の方は順調か、しきりに探りを入れる。テイラーが支払いにきた金はほんのわずか (6ペンス) 不足してはいたが、夫人は意に介さない。領収書記入のために筆記用具をエレンに取りに行かせた隙に、相応しい結婚相手としてエレンをテイラーに勧め、多額の遺産相続の可能性もある、と匂わせる。

戻ってきたエレンを横に、夫人は彼女が料理・裁縫が得意なのはもちろんのこと、寄宿学校で4年間教育を受けた才女でもあり、派手ななりで浮ついた女たちとは違う、と懸命にテイラーに売り込む。壁に掛かっているフィドルがテイラーの目に止まり、ロビンがフィドルを焼却処分したと聞いていた彼は驚く。

夫人とエレンは事情を説明する。この家に来たことのある浮浪者が数週間前、泥炭の穴のなかで野垂れ死にしかかっているのを発見され、親切にしてくれた御礼としてそのフィドルをロビンに渡すように、今わの際に言い残したのだという。サミュエルの言うにはその楽器は50ポンド以上の値打ちがあり、「ニコラス・ワーナー (Nicholas Werner) へ 尊敬の証として楽団一同より 1878年ウィーン」と刻印されていて、浮浪者の自慢話は決して法螺ではなかったことが明らかになっている。これを譲り受けたロビンは、フィドル断念を約束した手前、演奏を慎んではいるものの、やはり弾きたい誘惑に駆られている、とエレンは語る。

本来、受取人の自分が貼るべき証紙をテイラーから夫人は貰って領収書に貼り、金を保管に奥に消える。ロビンとジェニーの結婚がクリスマスに予定されていると知らせるエレンをテイラーは引き寄せてキスしようとするが、ロビーとサミュエルが帰宅するのが窓辺から見え、エレンは身を離し、庭へ出て行く。

ロビーとサミュエルが登場。結婚が決まったというのに浮かない様子のロビーは、不思議な縁で手に入れたフィドルと浮浪者の話をする。浮浪者の演奏にはまるで〈ハーメルンの笛吹き男〉を思わせる魔力があり、その魔力に引き寄せられるかのように後を追ったことや、昨夜も確かにその調べを聞いたことなどである。テイラーは、音楽大会の審査員のドイツ人教授がロビーの演奏を賞賛していたことや名刺を預かっていることを伝え、手渡そうとするが、受け取ると未練が生じるから、とロビーは断る。

テイラーはエレンの父ウィリアムに会いに退出。サミュエルは、ロビーが誓いを破ってフィドルを演奏したことを知っていると告げる。夜中に裏の溝で2時間もの間、演奏しているのを彼は見続けていたのだった。ロビーはフィドルの魅力に抗しきれないとして壊そうとするが、価値ある楽器だからとサミュエルは押しとどめ、むしろ演奏家の道を進むべきだと勧めるが、ロビンは拒絶して退場。

ロビンが演奏家で成功すれば大儲けできる、とサミュエルが独り言を言っていると、祖父が登場。良からぬ考えを吹き込まないようにサミュエルを諭し、二人は退場。

夫人が登場し、掃除とお茶の準備をする。相談を終えたウィリアムとジョンが登場。ジョンの禁酒講演が素晴らしかったと称賛して、奥へ下がる。講演会を欠席した、飲兵衛のウィリアムは、パブの数が多すぎるとい

うジョンの見解に異議を唱え、(実際にはくどくどと分かりにくい言い回しだが) 酒を飲めば酔っ払うのは当たり前前で、不便なことにパブが近所にないために帰宅が遅れて翌日の仕事に影響しているのだという説明をジョンにする。

盗み聞きでもしていたのか、夫人が怒って登場し、話題を肝心の用件に変えるように夫に命じる。ウィリアムはジョンには遺産相続者として一人娘ジェニー以外いない(ダブリンには結婚している妹がいるが) ことを確認し、2年近く前に購入した農地と全財産を持参金としてジェニーに与えるならば、自分の側はロビーに100ポンドの小切手を与えるという条件を提示する。これにはジョンが厳しく不服を訴え、キレイニー(Killainey)の名家グレイムの娘を500ポンド未満の支度金では絶対に嫁がせない、と反論する。ウィリアムも負けじと、自分の母方の祖父や親族が名士であることを訴え、そんなことも知らないで禁酒の講演を偉そうにやっているのか、と声を荒げる。

再び夫人が登場して注意を与え、ウィリアムはジョンの条件をのむことを言明する。ジョンはさらにもう一つの条件として、ロビンがフィドル演奏をしないことを要求し、これにはウィリアムも基本的には賛同して、両家の合意が成立する。ウィリアムは刈り取り結束機を見せにジョンを外へ案内する。

夫人は4度も戸を叩いて400ポンドが限界であることを思い出させようとしたが無駄だったと呟き、ロビンを心の中では大事に思っているのに違いない、と夫の胸中を察する。

ジェニーが来訪。最近会う機会のないロビンの様子を夫人に尋ね、最近不機嫌であることや、弾かないと誓ったフィドルを目に付く場所に置いておくのは非情であること、フィドルには才能があっても農作業には不向きであることを夫人に訴え、フィドルを手にして物思いに耽る。夫人は気分を害して、お茶を淹れに下がる。

ロビンが登場し、誘惑のもとであるフィドルを叩き壊そうと言い出すが、ジェニーは反対する。自分を使って名を揚げてくれ、とフィドルが呼びかけてくれている気がするという告白をロビンから引き出したジェニーは、フィドル演奏家の道を歩み、名声と富を得て周囲の者を平伏させてからでも結婚は遅くない、とロビンを励ます。勇気を貰ったロビンはジェニーを抱擁する。

夫人が登場し、ウィリアムとジョン、テイラー、サミュエル、祖父が登場。ロビンはフィドルをケースに収め、この楽器で運を試すことを一同の前で宣言する。ジョンは憤然として席を立ち、婚姻の解消を伝え、娘ジェニーを従えて退場(途中、彼女はジョンにキスする)。ロビーはテイラーから彼が預かっていた音楽教授の名刺を受け取る。すぐさまジョンの後を追って前言を撤回しろ、というウィリアムの怒号にも関わらず、ロビンの決断は揺るがない。戸口に向かうロビンにウィリアムは、二度と助けを求めに戻ってくるな、と勧告を言い渡し、出てゆけと激しく連呼する。幕。

エピローグ 同日の深夜、午前零時ごろ。炉端には祖父、食卓にウィリアムとサミュエルが座っている。ウィリアムはロビンの家出を恩知らずだと嘆き、祖父は暴風雨の戸外で孫が難儀しているだろう姿を心配する。この件の原因はサミュエルがフィドルを処分せずにこれ見よがしに置いていたことや、ロビンに野良仕事を強要したウィリアムの金銭欲であり、人生の生き甲斐はけっして金だけではなく、一日の労働を終えて帰宅するのが喜びとなるようなささやかな事柄だと訴える。ロビンのひなびたバラッド音楽は、傲慢な都会人ではなく、沼地の雨や霧や夜をよく分かっている我々こそが正当に評価できるものであり、その調べは我々の心の叫びに調律されていることが、よく分かっていたはずだ、と祖父は切々と語る。ウィリアムは涙声でロビンの身の安全を神に祈る。祖父から「いつまでも怒るな⁵」(Let not the sun go down upon your wrath.[34])と呼びかけられたウィリアムは、戸の門を外して、掛け金(hesp)をかけたままにする。幕。

標題『道の曲がり角』は、(本誌前号の拙論で紹介した)レノックス・ロビンソンの『岐路』(*The Cross-roads*, 1909)の主題と共通するものがあるが、メインのこの戯曲の方が2年半早く初演されている。職業選択、進路決定という人生の岐路に立たされたロビンは、自らの内面

の声に忠実に従い、音楽の道を選択する。農民の息子は農業を継ぐべきだという固定的な職業観に対して、一人ひとりの人間の個性を尊重することの重要性をメインは呼びかけている。

ホロウェイによれば⁶、「人間性と巧妙で効果的な対話に満ちあふれ」「適応しない環境のなかで芸術の魂を持つ者の葛藤が説得力をもって示されて」おり、サミュエルを演じた劇作家自身の演技も見事だったと称賛し、シングの『西の国の伊達男』の騒動以来、彼が見たアビー劇場の芝居のなかでは最高の大入りだったという。

②『のらくら者』(The Drone) 3幕の喜劇

1908年4月24日、ダブリンのアビー劇場においてアルスター文芸劇場によって、ハーディング(Robert Harding)の『人民の指導者たち』(Leaders of the People)とともに初演された(このときは2幕物)。同年11月2日のベルファースト、エキシビション・ホールでの上演が北アイルランドでの初演(やはり2幕物)。現在の3幕物としての初演は1909年5月7日のベルファースト、グランド・オペラ・ハウスでの上演である。劇作家メインみずからも下男サム・ブラウン役で出演している(当時30歳で50歳すぎの老け役を演じたことになる)。全編を通して、時は現在(1908年)、北アイルランドのダウン州にある、マリー家の台所。

第1幕 マリー家の30歳すぎぐらいの女中ケイト(Kate)が、傷んだソーダ・ブレッドをより分けてバケツに廃棄処分している。この家の娘メアリー(Mary Murray)が調理に失敗したものらしい。戸外から、やはりこの家で雇われている初老の下男サム(Sam Brown)が、脱穀機が故障して主人が怒っていると、スパナを探しにやってくる。都会の学校を終えたばかり、世話を焼く母親もいないからメアリーの家事下手は当たり前だとサムは軽蔑し、スパナが見つからないので戻っていく。

奥の部屋から18歳の可愛らしく元気なメアリーが登場。奥の作業場にいる叔父のダニエル(Daniel Murray)に食事を運び終えたところ。叔父は頭が良く話し上手だとメアリーは褒め、近所の人々、とりわけセアラ・マクミン(Sarah McMinn)からの評判は悪い、とのケイトの言葉も、相手にしない。

寝起きの様子でマフラーに眼鏡の50歳位のダニエルが登場。もう午後1時半かと驚くが、メアリーの父ジョンが早朝7時から農作業と聞いても、頭が悪いからそういう目に会っていると言いたげな口ぶり。昨夜は遅くまで送風鞆(fan-bellows)の発明に頭を捻っていたらしい。メアリーは叔父が昨年ベルファーストに発明特許の用件で上京した折に出会い、紹介すると約束しながら果たしていない青年について、根掘り葉掘り聞き出そうとし、黒い髪で背が高く二枚目だという情報に喜ぶ。もうロンドンにいるだろうと聞き、一度は落胆するものの、知人を使ってロンドンからの偽・呼び出し電報を打たせれば、ジョンから旅費を貰えるはずで、叔父にとっては発明売りこみのロンドン2週間滞在、メアリーにとってはイケメンの彼氏獲得という、共通の利益につながる作戦を提案し、叔父の約束を取りつける。

ケイト、続いて依然スパナを捜し中のサムが登場し、メアリーは居間にスパナがないか見に行く。サムは、セアラがジョンの後妻になるのでは、という情報をケイトにもたらず。その根拠は、ジョンが最近頻繁にセアラの兄アンディに会いに行つては、家庭の惨状を嘆き、節約家の後妻の必要性を仄めかしていたからである。その縁組の障害となるだろうダニエルの様子をケイトとサムが戸の鍵穴から盗み見していると、裕福そうな青年アリック(Alick McCready)が登場。盗み見に加わった彼が思わず大爆笑の声をあげるので、あわててケイ

トとサムは逃げ出す。

笑い声を聞きつけてダニエルが出てくる。アリックは、昨夜ダニエルがパブで喋った発明品の話聞き及んだアンディとセアラが非常に興味を示し、今日その発明品を見学に来る予定だと伝えたあと、姪のメアリーとの縁を取り持つ手伝いをしてもらえないか、と切り出す。ダニエルがアリックにその交換条件を回りくどく説明していると、スパナが見つからなかったメアリーが戻る。メアリーは例の偽電報作戦の件を思いだし、段取りを相談するためにアリックとダニエルを作業場へ連れて行く。

ダニエルより1、2歳年長、大柄で陰気な容貌のジョンが汗まみれで怒りながら登場。筆筒の上の棚からすぐにスパナをつかんでテーブルに放り、付いてきたサムを叱りつけ、脱穀機の修理に行くように命じる。

作業場からダニエルが出てきて、発明に成功できぬまま15年以上も無一物の自分の面倒をみてくれたことを感謝し、釉葉を発明した陶芸家パリスィ⁷ (Palissy) などの例を引きながら発明には時間がかかり、商品化してくれる人間も必要なのだと弁明し、ロンドンへの旅費の工面を願い出る。食事なしの三等列車の旅で15ポンド、いや野宿で10ポンドと懇願するダニエルに、ベルファーストへの旅費3ポンドが限界だとジョンは答え、家計をうまく切り盛りする者がいないことを嘆く。

メアリーとアリックが作業場から登場。ダニエルの今回の発明品が売れるかとのジョンの問いにアリックが太鼓判を押すので、ジョンは喜び、ダニエルの頭の良さを褒める。アンディがセアラを伴ってまもなく2時にその発明品見学に来る予定と聞いたジョンは、顔を赤らめて身繕いに走る。

アリックは偽電報の差出人の名前を何にするか尋ね、ダニエルは何でもよいといくつか列挙し、そのうちの「グレッグ」を使用することにアリックは決める。アリックはさらに、ジョンがセアラに気があることを伝え、詳しい話を小道でこっそり打ち明けたがるが、メアリーはそれを拒んで、出て行く。

ジョンはしきりにダニエルにも正装するように促し、その様子を見てもしやセアラが原因なのでは、とダニエルは思い当たり、問いただす。ジョンはためらいがちに、本人の意思は確認していないが、家庭の切り盛りのためにセアラが適任の女性と判断したこと、ミシンの取次店をやっている機械関係にも詳しいからダニエルともそりが合うだろう、と告白する。一方、もしもあの女がこの家に後妻として納まるなら、わしは終わりだ、と絶望するダニエル。幕。

第2幕 数時間後の台所。ケイトがお茶を飲んでいると、サムが入りスパナを元の場所に戻す。マクミン兄妹を乗せたと思われる軽馬車が近づき、サムは馬をつなぎに出て行く。ケイトはジョンに兄妹の来訪を告げ、ジョンはダニエルに準備を急がせる。メアリーは例の用事(偽電報)で家にはいない。迎えに出たジョンは、初老のアンディ、年齢不詳のセアラ、そして機械関係に詳しいスコットランド人技師のドナル・マッケンズィ(Donal Mackenzie)を連れてくる。なかなか現れないダニエルの作業場を覗いた3人の客人は、考案中の発明の図面はごくわずかで、むしろ大量の古新聞やウィスキーの空き瓶が散乱してタバコ臭い作業場に呆れた様子。

ジョンに呼ばれてようやくダニエルが登場。マッケンズィは技師としての通算8年の経歴や地元グリーンノック(Greenock)で経営する、往復運動ピストン会社の社長(senior partner)の現職を自慢し、工学分野で先頭に立つには専門雑誌の論文を読むべきであり、彼が筆名で寄稿している記事を読んだことがあるか、とダニエルの実力を瀬踏みする。そして話題がついに送風機に移ると、ダニエルは人前で話すのは気後れがするからあとでゆっくり、と言って逃げを打つ。ロンドンに交渉に行く心積もりの者が気後れとは、とジョンはからかい、早速セアラがロンドン旅費を7、8ポンドと見積もるので、その儉約家ぶりに感心する。ジョンは、まずアンディとマッケンズィをダニエルが脱穀機にでも案内して互いに打ち解けてから発明品の説明を始めることを提案し、セアラと二人きりになる機会を作る。

ジョンは、ダニエルとの暮らしや前妻アニー(Annie)の死後の苦労などを語り、学校の学園祭でセアラに会えるかと期待していたと切り出す。セアラは尻軽女と思われたくないし、アンディからも身を律するように言われているからそのような浮ついた場所へは行かないし、これまでに3度もプロポーズを断ったのは他に意中の人がいるからだ、と話が次第に盛り上がっていく。

サムが登場し、脱穀機の調子が悪いと伝えるが、ジョンは様子を窺う口実だと判断して追い返す。セアラは、メアリーには家事や儉約を指導する女性が必要であると告げ、自分がこれまでに儉約した実績を披露する。ジョンは満を持してセアラに結婚を申し込み、彼女は受け入れる。セアラはすぐにみなに発表を望むが、慎重なジョンはいきなりではなく、数日後の発表を勧める。

メアリーが登場。これまでアリックと一緒にいたと聞いて、相応しい交際相手ではない、とセアラが意見するので、メアリーは反発。ジョンは、セアラの忠告には従うように意味ありげに言い渡して退場。セアラから帽子の置き方まで小言を言われてかっとなったメアリーは、自分の帽子だからどうしようと勝手だと、帽子を踏みつけにする。女中のケイトが入ってくると、セアラはあたかも自分が主人であるかのように湯沸しを命じ、お茶の葉の量の原則——2杯分に匙1杯の葉——を実演してみせ、砂糖を入れるかどうかを事前にお客に尋ねておくなどの礼儀作法を押しつけ、陶器類を確認に一人で別室に行く。

ダニエルが登場。メアリーはアリックが無事に偽電報を送信したことを報告し、いまとなつてはロンドンにいるイケメン青年よりも頼れるアリックに好意を感じていること、ついさっき父親がセアラに求婚する現場を盗み聞きし、セアラが継母になれば耐えられないことなどを話して、涙ぐむ。まもなく発明品のプレゼンが待ち受けており、なんとかセアラたちを打ち負けたいと願うメアリーに、ダニエルは機械に関する本を持ってこさせる。ケイトが読んでいた本はいわば「親が子に語って聞かせる自然科学」といった内容で時代遅れのもので、肝心の鞆に関する記述はあまりない。本に夢中のダニエルを放ってメアリーは退場。セアラが食器類の保管場所や数量などをしつこくケイトに問いただすので、ケイトは憤慨する。

マケンズィ、ジョン、アンディが外から戻る。ジョンはセアラを呼んで、ダニエルによる発明の説明会が始まる。鞆の定義やふつうの鞆との違いなど、しどろもどろの説明で懸命に時間稼ぎにつとめ、ようやくサムが偽電報を持って登場し、ダニエルは難を逃れる。しかし、このやりとりを通して、セアラたち3人はダニエルの発明がいかさまであることを確信する。

メアリーはジョンにセアラとの再婚は止めるように必死に懇願するが聞き入れられない。ダニエルが鞆を持って出てきて、やはりセアラがこの家に来るのなら自分は出ていく、と宣言する。発明家の才能を皆から疑われているだろうが、マケンズィこそ他人のアイデアを盗む食わせ者で、発明の説明をして横取りされるのはご免だと、弁解し、自分はセアラから嫌われておりこの家から厄介払いされてしまう、と訴える。

お茶会に呼びに来たセアラは、実際にダニエルは役立たずのペテン師で居候させる訳にはいかない、と辛辣に言い放ち、電報が近隣の町バリーアニシ (Ballyannis) から発出されている事実を指摘して、退場。

ジョンはセアラの反感がダニエルの言うとおりで知り、自分の結婚でこの家を去ろうとするダニエルへの同情心を募らせる。電報の発信地疑惑については、グレッグが出張で近くを通りかかった折に送信したというダニエルの言い訳をジョンは鵜呑みにし、むしろセアラの指摘を悪意のあるものに誤解する。光明を見出したダニエルは、ジョンの求婚の言葉には第三者の証人も文書の記録もないことを確かめ、いまなら撤回できると訴える。そこへ早く食卓に戻るようにとの高飛車なセアラの声がして、ジョンはセアラと金よりもダニエルとの語らいの方を選び、婚約解消を宣言、兄弟は握手を交わす。幕。

第3幕 2週間後の台所。メアリーが料理の本をケイトに読んできかせていると、サムが郵便物を届ける。メアリーは自分宛の差出人不明の葉書——どうやらマケンズィかららしいと判明する——を読む。セアラの筆跡と思われるジョン宛の書留もある。サムは、ベルファーストからダニエルが今日戻る予定かと尋ね、発明売り込みに成功して大儲けしたらしいという酒場での噂話を伝え、一念発起して家事に専念したはずのメアリーの料理やパン作りが相変わらず下手だと不満をもらす。

ジョンが外から戻り、メアリーは書留を手渡す。手紙の差出人はアンディで、妹セアラとの婚約不履行の件で次回の巡回裁判 (Assizes) で訴訟をおこす意向であり、それを回避するためには慰謝料1,000ポンドの示談金を要求するものであった。女教師に冗談で求婚した男の言葉を聞いていた学童の証言が証拠採用され、婚約不履行に罰金100ポンドが言い渡された事例をケイトが紹介する。ジョンは自分に理はあると思うけれど、婚約不履行は女に有利で、市で値切った連中が陪審員となり、化粧して着飾ったセアラを見たら、自分は敗訴す

るかもしれない、と弱腰になる。訴訟を恐れてセアラとの結婚を選ぶことのないようにメアリーは懇願する。

サムがダニエルの帰還を伝える。立派な服装にスーツケースや紙袋を抱えて上機嫌のダニエルが登場。荷物運びのサムにチップを渡すのを見て、ジョンは1,000ポンド請求の書留をダニエルに読ませ、悉く男の方が敗訴して多額の賠償金を払っている事実を伝える。ダニエルはほぼ用事は順調に進んだが、結果は一両日中に分かると言い、貰った5ポンドのお釣り（1ポンド10シリング6ペンス）をジョンに返す。彼はこの件は拙速に事を進めたりせず、ましてセアラとよりを戻そうとは考えないように、ジョンに言う。ジョンはそれならば示談金をダニエルが用意し、だめなら結婚するしかない、と憤然として退場。

メアリーがアリックを連れてくる。ダニエルはアリックにアンディを呼びにやらせる。ケイトとサムが登場し、ダニエルが駅から帰る際に上等の葉巻をふかしているのを見た伝え、鞆が2,000ポンドで売却された噂がすでにあちこちで語られている、とダニエルに知らせる。

アリックを送ってきたメアリーは、セアラの得意料理プラム・ケーキに挑戦するために、ダニエルから6ペンス貰って、ケイトに材料の小麦粉を買いに行かせる。ダニエルの作業場から爆風音が聞こえ、鍵穴から覗いた彼女は、発明作業が進展していることに喜ぶ。出てきたダニエルは、知人に設計図面をみせたところ試作品を拵えてくれたことを明かす。

マケンズィが訪ねてきて、メアリーに好意を寄せていると告白する。メアリーは、ダニエルの鞆の試作品を試験して好意的な論評を述べるようにマケンズィに依頼するが、まだ特許が得られていないとダニエルは拒否する。

アリックに呼ばれたアンディが登場。ダニエルは1,000ポンドの要求は法外だと批判し、ジョンとセアラの間に愛情はなかったこと、ラブ・レターなどの手紙の交換もジョンからの言い寄りも、写真交換も指輪の贈り物もなかったことをダニエルは克明に確認し、肝心のプロポーズの場に第三者がいなかった以上、もしジョンの物忘れがひどく、求婚した覚えがない、と彼が証言すればセアラに客観的な勝ち目はないはずだ、とアンディを説き伏せる。

作業場で試作品を見に行っていたメアリーが戻り、マケンズィがその性能に満足したと伝え、アンディも見に行く。

手作りのプラム・ケーキも食べずに帰ろうとするアリックをメアリーは呼び止める。アリックは指輪を取り出し、メアリーの指にはめる。小麦粉の買出しに出たケイトがジョンとともに帰宅。ジョンはメアリーが使いすぎるので無許可の購入を禁じており、娘を叱る。

アンディたちが作業場から戻り、マケンズィは、この発明品がセアラの得る賠償金以上の価値があると評価する。すかさずダニエルはこの発明の権利と特許使用料を示談金の代償に充てると提案し、もし訴訟沙汰になれば裁判費用や醜聞や敗訴も覚悟しなければならないと脅す。アンディは慌ててこの提案に応じ、ダニエルは用意していた同意書にアンディのサインや、証人としてアリックやマケンズィのサインもさせ、鞆の試作品をアンディに持たせる。マケンズィは偽りの評価のご褒美を貰おうとメアリーの方へ行くが、その指にはめられた婚約指輪を見つけて、観念する。アンディとマケンズィを送り出したダニエルに、ジョンは、やっぱりダニエルは頭がいいや、と感謝する。幕。

のらくら者の発明家ダニエルを中心に展開する喜劇である。彼の年来の発明品「送風鞆」に果たして本当に買い手がつくのか、その発明品は価値ある完成品なのか、終幕を見る限りでは判断できない。たいした仕事もせずに兄ジョンの家に20年近くも居候を決め込んできたのだとすれば、無為徒食の輩、現代ならニートのなれの果てとして、批判されても止むを得ないであろう。料理下手で食物を無駄にするメアリーと同様に、金食い虫として社会的には役立たずの存在である。マリー家ではただひとりジョンだけが肉体労働に励み、女中や下男の給金まで賄

わなければならないつらい立場にあり、彼が儉約家のセアラに家計の改善を託す気になったのも理解できる。しかし、ジョンは理の人ではなく、情の人であった。のらくら者ではあっても血を分けた弟への情愛にほだされるジョンは、ダニエルを路頭に迷わせることは出来ない。セアラとの結婚によって得られる経済的恩恵よりも彼は家族の温もりや調和を選んだ。貧しくとも甲斐性がなくとも、兄弟の絆は金では断ち切れない強靱さを持つものであることを『のらくら者』は教えてくれる。

劇作術の観点からは、現代の観客には展開がまどろっこしいきらいがあり、伏線かと思えた出来事が放置されている場合もある。(たとえば、ロンドンの好青年やグレッグなる架空の人物は、先の展開で登場を大いに予期させるが、現れない。)しかしながら、全体として見れば、プロットはよく練られており、訴訟回避の策略は痛快な妙味がある。

③『誓約』(The Troth) 1幕

1908年10月31日、ロンドンのペッカムのクラウン劇場にてウィリアム・モリソン劇団によって初演。同年11月25日にダブリンのゲイアティ劇場にて上演。

19世紀なかば、農夫エバニーザー⁸・マカイ (Ebenezer McKie) 家の台所。深夜近い時刻だが、35歳前後の妻のアニー・マカイ (Annie McKie) 夫人はまだ起きて暖炉の前で暖をとっている。この家に雇われている30歳くらいの下男ジョン・スミス (John Smith) が離れて立っている。戸外では激しく寒風が吹き荒れているが、燃料の泥炭は底をつき、湯を沸かすこともできない。墓地に眠るわが子は寒かろうと夫人は感傷に耽るが、スミスは元気を出すためには政治の話がもってこいであり、トーリー党員を増やすためなら全財産を政治献金しても惜しくはない、と保守党蠱屑を自慢する。政治に無関心な夫人は、バリーハンロン (Ballyhanlon) まで金策に出かけた夫エバニーザーが首尾よく金子を得て戻ってくるかを気にかけている。

エバニーザーの姉(あるいは妹)は分限者だが、父親の逝去のさいに、本来なら彼女が受け取るべき遺産50ポンドをエバニーザーが着服したらしく、両者は仲違いしている。当初は弁済の意図があったものの、二年続きの凶作でその金も使い込んでしまったことを夫人はジョンに漏らし、過酷で吝嗇な地主によって、明日から強制立ち退きが始まることを心配する。

しかしながらジョンに言わせると、ムーアやマグワイア、マギネスのような連中 (them Moores and Maguires and Maginnesses) が、この冬の地代支払いが免除されないなら何をしでかすか分からんぞ、と地主に脅迫的な申し入れをしたせいで地主が態度を硬化させているのであり、地主のフォザリングム大佐 (Colonel Fotheringham) はまっとうな人物だと、彼は地主の肩を持つ。それに対し夫人は、地代を全納できる者は村に一人か二人だけ、残りの未納者には全員分け隔てなく、立ち退き命令状が送られている事実を指摘し、執行吏 (bailiffs) による強制執行はまずムーア家、次にこのパーク家だとの噂であり、明日には路頭に迷わねばならない、と泣き崩れる。

ジョンは、ご主人の金策がきっと上手くいくから大丈夫だと慰め、地主に悪口雑言を浴びせた報いがムーアたちに降りかかっているのだと、自らに言い聞かせるかのように言う。ムーアたちはこの6週間、粗食 (Indian meal: トウモロコシのひき割り) しか口にしておらず、若い頃は黒髪に愛らしい碧眼の美女だったムーアの妻メアリー (Mary Moore) は、いまや黒色熱⁹ (black fever) で死の床に臥し、回復の見込みはない。夫ムーアは

そのため半狂乱の態でおろおろと駆けずり回っているらしい。

戸外で足音がして、噂の主、フランスィ・ムーア (Francey Moore) が訪ねてくるのをジョンが知らせる。夫人は彼を中へ入らせる。ムーアは蓬髪に黒鬚、荒々しく陰鬱な目をしている。妻の死期が迫り、家には司祭が待機しており、妻の発する臨終の喉鳴りの音に居た堪れなくなって、エバニーザーに会いに来たのだという。これまでに二人の子どもが喘ぎながら死にゆく様を見届けたことがあるにも関わらず、妻の死は見るに忍びないらしい。

エバニーザーがようやく帰宅。壮健な体躯だが、窮乏でやつれはて、ムーアの存在すら目に入らない。金策の成果を問う妻に、同じ一つ屋根の下で暮らした幼い頃に触れる手紙を3度も書き送ったが、まったく梨のつぼてだったと、直談判した今回も何の援助も得られなかったことを伝える。

暇乞いをするジョンに、エバニーザーが今日の分までの俸給支払いの確認をすると、すでに貰ってはいるが、まだほかに10シリング貸しがあるけれども、荘園の庭師の仕事を得たからかまわない、とすこし悪意のあるプライドをこめて語り、陽気に口笛を吹きながら去っていく。

ここで初めてエバニーザーはムーアの来訪に気づき、帰路マイケル・マロウンから貰ったというウィスキー小瓶をポケットから取り出し、警官を従えたフォザリング大佐が代理人宅へ向かっているのを目撃したので追いかけて直訴を試みたが、金がないと分かると犬のようにあしらわれたこと、マグワイア老未亡人が跪いて大佐に黒い呪いをかけると、侮蔑的に指を鳴らして大笑いしたこと、今夜遅く大佐は地主邸にとんぼ返りする予定であることなどを話して聞かせる。

エバニーザーは妻がムーアを怯えた様子で見つめているのに気がつき、寝室へ下がらせる。妻がいなくなると、エバニーザーはムーアに酒を注ぎ、二人はお互いの窮状を話し合う。とくにムーアは、2年前の凶作時、地主に猶予を願い出て拒絶されたのは、地主が「名誉の負債」、つまり賭博の借金を抱えていたからであり、さらに輪をかけた凶作で作物が腐敗してまったく収穫がなかった昨年もみんなで嘆願に出かけたが、地主はまったく取り合わず、やがて流行り病で子どもたち(エバニーザーの一人息子とムーアの二人の子ども)が次々と死んでいったこと、わずか1、2ポンドの金さえあれば救えた命は、いまとなってはどんなに大金を積んでも取り戻せないし、神様に復讐を求めて泣き叫ぶ子どもたちの声が風のなかに聞き取れること、子どもたちの食べ物を搾取したばかりか、俺たちのことを、土地の耕し方を弁えない、怠惰で酔っ払いの豚ども呼ばわりし、口では何と言っても連中は臆病な野良犬のように尻尾を巻いて逃げるだろうと、ほざいていたのは、他でもない地主のフォザリング大佐だった、とまくし立てる。

それを聞いてエバニーザーも激昂し、1798年の反乱で神を畏れる心を地主たちに植え付けたご先祖様に倣って、今宵同様の行動に打って出ることを宣言し、銃に手を伸ばす。ムーアも入りがけに戸口の樽の後ろに隠しておいた銃を取りに行き、同じ気持ちだと行動で示す。

ムーアはさらに地主の襲撃計画について説明する。谷間の街道を挟んで二方向から狙うのが絶好の銃撃地点であるが、一方は垣根を越えたあとは茨の土地 (a hedge with brambly land) が続き、他方は針金雀枝畑^{ハリエニシダ}で背後には荘園の塀 (most whins with the demesne wall behind) が迫る地形で、後者に配置された者は捕まって縛り首になる可能性が高い。そこで彼は、どちらの銃撃地点に配置するかをコイン投げ¹⁰で決定するように提案する。

エバニーザーはコイン投げの前に、ある誓約を結ぶことをムーアに申し出る。それは、もし二人のうちの一方が身柄を確保されたら決して相手のことを口外しないこと、そして捕獲を免れた者は相手の妻の面倒をみることに、という誓約であった。ともに子どもを失い、かつ二人の息子の埋葬は同じ日に営まれたという巡り合わせもあり、その埋葬の日、ムーアは子どものようにえんえん泣きじゃくり、エバニーザーは実はその晩、地主銃殺を意図して件の地点で待ち伏せしていたものの、天の配剤で地主がやって来なかったのだと明かす。

ムーアが神に誓って誓約を受け入れたあと、エバニーザーはポケットからコインを取り出し、テーブルに置く。最初にムーアが「表」を選び、二人で確認して、ムーアの負け、すなわちムーアが危険な針金雀枝側^{ハリエニシダ}配置に決定される。ムーアは銃撃用の雷管 (cap) を求め、エバニーザーは小箱をマントルからテーブルに降ろし、雷管をいくつか手渡す。彼はジョン・スミスが舞い戻ってきて銃がないのに気づかれるのを怖れて、戸に外鍵をかけたうえ鍵を持って行く慎重さを見せ、ムーアに続いて出て行く。間。

奥からマカイ夫人が夫を呼びながら登場。筆筒にあったお茶の葉をムーアに手土産に持たせようと思っただけだが、誰の姿もなく、戸が外から施錠されているのに気づく。ムーアの目が闇に光る猫の目のように不気味だったことを独りごちていると、ジョンが戸を叩く音。

ジョンは戸口から窓辺に回り、ムーアの妻がついきましたがた亡くなったと近所の者から聞いたこと、途中でムーアやエバニーザーに出くわすと思っていたが見当たらなかったことを戸外から伝える。夫人はテーブルの雷管箱に気づくと同時に銃があるべき場所がないことを知って、思わず叫び声を上げるが、機転を利かせてすぐに、釘に引っかかっただけよ、と嘘をつく。

遠くで銃声が1発、短い間をおいてもう1発。ジョンは、エバニーザーとムーアは谷の方へ出かけたか、と尋ねるが、夫は家の中にいて、寒がっているので酒を取りに来たのだと夫人は取り繕う。遠くで叫び声が聞こえ、ジョンは事情を確かめに急いで立ち去る。

夫人は倒れないように思わずテーブルに手をつき、もしや夫の犯行ではないかと疑念を抱いて神に救いを祈る。戸外に静かな足音がして、エバニーザーが鍵を開けて登場し、敏捷に歩いて銃を元に戻し、寝室へ向かおうとするときに夫人が声をかける。

夫人はどこにいったのか、としきりに問いたが、エバニーザーは答えず、ジョンから夫の所在を尋ねられたが、家で寝ていると嘘をついた、と夫人は教える。ざわめき声が近づき、エバニーザーは蠟燭の火を吹き消し、誰もなかに入れるな、と妻に命じる。

再びジョンが窓辺から話しかけ、ムーアが地主銃殺の罪で警察に逮捕され、やがて絞首刑になるだろうこと、いま彼の身柄と地主の遺体を署へ搬送中であることを知らせて立ち去る。

夫人は、どちらが犯人なのか、と問い詰め、やがて目の輝きから、夫エバニーザーの犯行であると確信する。戸外を一行が通り過ぎたのを確認して、彼は妻に訴えるように両手を伸ばすが、彼女は何の反応も示さない。エバニーザーの最後の一言「ムーアにはもう妻がないんだ」で幕。

○果たされなかった「誓約」

マカイがムーアと交わした誓約は、二人のうち一人は逮捕され絞首刑となる可能性が極めて高いという前提に基づき、〈逮捕された者は黙秘を貫き、逮捕を免れた者は相棒の女房の世話をみる〉という責任分担、いわゆる「双務契約」の誓約であった。逮捕されたムーアはきっと緘黙を押し通して、共犯者マカイの名前を挙げることなく、従容として独り、吊るし首になり、誓約を履行するだろう。しかし、一方のマカイは、ムーアの妻の死によって果たすべき義務そのものが消失し、すでに誓約の履行が不可能になってしまっている。不可抗力による状況変化とはいえ、ムーアの妻の死は予期された事態であり、これでは都合のいい片務契約をムーアに押しつけたことになる。もし、ムーアの妻が死んだ後であれば、マカイはこうした対等な双務契約の提案はできず、二人の間にこの誓約はそもそも実現しなかったかもしれない。ムーアの妻の死をマカイがいつの時点で、どのようにして知ったのかはテキストでは不明だが、それはさておいても、最後のマカイの科白「ムーアにはもう妻がないんだ」には、誓約を実行できない我が身の後ろめたさ、良心の呵責が込められている。

銃声は2発でしばらく間をあけて谷間に響き渡った、とするト書きも微妙である。ムーアとマカイがそれぞれ1発ずつ発砲したと見るのが、理にかなった自然な解釈だろうが、どちらが

先に撃ち、どちらの凶弾が致命傷となったのかは、謎である。2発とも地主の身体を貫いたのか、それとも1発は標的を外したが、もう1発が地主の命を奪ったのか、テキストには明示されていない。もし仮に、最初のムーアの弾丸が当たらず、2発目のマカイの弾丸によって地主が死んだのが真相だとすれば、殺人未遂罪のムーアが絞首刑になり、殺人罪のムーアが生き延びるという皮肉な巡り合わせにもなる。殺人を犯したかどうか、妻の度重なる問いかけをマカイが無視しつづけるのは、犯行に加わった以上、当然の態度であろうが、まさしくマカイこそが真の殺人者だった——ムーアの発砲は当たらなかった——からなのかも知れない。標題‘troth’はもともと‘truth’を語源に持つ語であり、「約束（とくに婚約）」「誓約」の意味のほかに、「真実」の意味が根源にあることを思えば、文字通り「藪の中」で行なわれた銃撃事件の「真相」「真実」も標題からは読み取らねばならない。

○宗派を越えた団結

研究書などの指摘によれば、ムーアはカトリック、マカイはプロテスタントであり、宗派の垣根を越えた誓約であり協働であった事実がいっそう意義深いものであると解釈されている。この点は、うっかりすると気づかないまま、テキストを読み終えてしまいかねない。「カトリック」「プロテスタント」の語句はテキストには登場せず、ただムーアとマカイの死んだ子どもが埋葬された場所が、それぞれ‘chapel graveyard’と‘meeting-house green’であり、用語の違いに宗派の相違が暗示されているにすぎないからである。（他にはムーアの妻の名前 Mary もカトリックを強く示唆する。）地主の過酷な退去命令がまかり通っている社会の不正に対して、カトリックであろうとプロテスタントであろうと、搾取される小作人たちが団結して立ち上がる必要性をメインは訴えている。

ちなみに、2代にわたる長老派宣教師の息子メインが結婚相手に選んだのはカトリックの女性であった事実は、宗派の壁を越える営みをメインが身をもって実践したことを意味する。

○松居松葉の『雪のふる夜』との比較

メインの『誓約』を翻案する形でわが国の劇作家・小説家、松居松葉^{しょうよう}（1870-1933）が『雪のふる夜』（1921）という戯曲を書いていることは、先行研究として小嶋千明氏の綿密な論考（2004）があり、筆者は教えられるところが大きかった。松居松葉^{しょうよう}の経歴や『雪のふる夜』の梗概は小嶋論文に譲るとして、以下には、小嶋氏の指摘点と半数ほど重複するが、分かりやすくするために原作との相違点を箇条書きで列挙してみたい。

1. 登場人物に邏卒（＝警官）が加わっている。

この男、「山道 勇」なるベタな固有名詞を与えられているが、劇中で名前が使用されることはない。「邏卒なんて職務は、孫子の代までさせるものではないな。」(5)という台詞に自嘲めいた感慨がこめられているのは、彼が「奉還^{ごむらひ}武士」、すなわち大政奉還前は武士階級だったことに起因するようである。

2. 奉公人の隅蔵が好人物として描かれ、女将との関係もいたって良好である。

火がつかなかったのは、隅蔵の手際が拙いからではなく、邏卒が開いた戸口に立ったまま話しこんだためとされている。

主人が金策に出かけた先を言い当てたことに夫人が猜疑心を抱く『誓約』に対し、お牧は隅蔵の台詞になんの不審も抱いていない。このことは家族の私生活情報が奉公人と共有されていることを物語り、隅蔵が対等な扱いを受けていたことを物語る。

解雇日の日当以外に10シリングの貸しがあると主張し、無理に捻出するには及ばないとやや傲慢な印象のする『誓約』のスミスに対し、「おらあ^{あんま}餘り気の毒だから…」(16)と言いさして、その日当すら返上してもかまわないことを匂わせている。立去る時に口笛を吹くのは共通しているが、庭師として再就職先が決定して「陽気に」口笛を吹くジョンに対し、再雇用先のない隅蔵はただ単に口笛を吹いている。

3. 地主が意図的な暴君として描かれている。

賭博で拵えた負債を補うために地代を強制徴収している『誓約』の地主に対し、翻案では、証文を盾に悪辣な取立てを意図的に行なっている。肥料などの追加融資をあえて勧め、「最初から企んで」「家屋敷」を「捲上げ」ようとしていたのだと農夫たちは推測している。

4. 誓約は交わされず、自首する者をコインで決定している。

二人の農夫がコイン投げで決定するのは、『誓約』では有利不利の差がある襲撃地点の選択であるのに対し、『雪のふる夜』では犯行後に自首して絞首刑となる犠牲者をどちらにするかが取り決められる。

仁右衛門^{にえもん}の妻の死は不可避の事実として織り込み済みであり、〈残された者が相手の妻の面倒をみる〉という双務契約は、最初から提案もされていない。このことが、翻案の標題に『誓約』が、そもそも踏襲できない大きな理由だと思われる。

5. お牧の取り繕いの口実が異なる。

釘が引っかけたという実際的な口実の『誓約』に対し、仁右衛門の妻の亡霊が見えた、とお牧は心理的な理由をあげている。

6. 自嘲気味の台詞が仁右衛門に追加されている。

家屋と家族を失って天涯孤独となる仁右衛門は、「この位のんきなものあ、又と世間にはあるめえ。」(20)と自嘲している。

7. 留五郎は自棄酒用に自ら酒を買い求めている。

友人からウイスキーを貰ったらしい『誓約』に対し、留五郎は上級酒である「諸白」(掛米と麴の両方に精白米を使用した酒)を自ら買い求めている。地代支払いは無理でも酒代程度の持ち合わせはあったことになる。

8. 殺人歴のあるはずの留五郎が、暗殺後に狼狽した挙動をみせている。

「官軍と戦あした事のある人間」で、「白河口の落城の時にあ、此鉄砲で三人打殺してやつた」(23)と豪語する留五郎が、暗殺後に「周章て、かけ入り」「猫に追はれし鼠の如く、怖々とし」(31)、5度も吃音で喋るほど、取り乱している。他方、100年以上前に流血の反乱を起こした先祖の血は受け継いでいるものの、みずから殺人を犯した経歴はない『誓約』のマカイの方が、暗殺後に冷静沈着な対応を見せ、「軽やかに」(lightly [101])身をこなし、その台詞に乱れはまったくない。

9. 最後の台詞とト書きに加筆がある。

翻案には「仁右衛門の女房は死んだ。」に続けて、「が、おらには、おらには、…」という言いさしの台詞が付け足され、「お前という女房がいる」といった台詞を暗示させる。さらに、仁右衛門は「手を伸ばして妻の肩にかけ」ており、最後は「(風の聲しきり、又戸をた、く音——幕)。(36)があり、隅蔵なのか邏卒なのか分からないが、深夜の訪問者が暗示されて、不安を抱かせる終わり方になっている。

10. 降雪が強調されている。

邏卒も仁右衛門も「満身雪にまみれ」(4/12)で登場し、留五郎も「合羽の雪をはらひ」(14)帰宅する。積雪はもちろんのこと、吹雪いていることが東北の厳しい冬を表わすのに用いられているが、原作では雪は言及されない。

11. 貧窮の度合いがやや小さい。

泥炭が底をつき、薪も翌朝用にとっておかねばならない『誓約』に対し、翻案では木小屋に割木がまだ大量にある。囲炉裏にはサツマイモが入れられ、美味しい焼き芋が出来ている。

12. 二人の農夫の宗旨の違いが明らかではない。

「だれにでも馬鹿にされ」ているが、「腹あえ、人間」(11)と評される仁右衛門の宗派が留五郎と異なっているかについては言及がない。

なお、テキストには明らかに誤植と思われる箇所が散見されるので、指摘しておきたい。

p. 8, 1.1: から⇒隅蔵, 1.4: 隅蔵⇒お牧, 1.5 邏卒⇒隅蔵, p. 12, 1.1: 仁左衛門⇒仁右衛門,
p. 13, 1.1: 驚蔵⇒隅蔵, p. 34.1.3: 隅蔵⇒お牧, 1.4 (窓に近よりて) ⇒隅蔵 (窓に近よりて)

○時代背景

この作品は19世紀半ば、すなわち1850年前後に設定されている。この辺りの農民の置かれた状況を簡単に付記しておこう。「1840年のデイジー土地法」は、「小作人が改良を加えた土地を保障もなしに取り上げることのできる白紙委任状を、地主に認めたもので」「1849年から1882年の間に、約10万世帯が故郷を追われた」という記述¹¹がある。いくら懸命に耕しても、地主の恣意で立ち退きを迫られる状況にあったことが作品からも窺える。

④『頓馬』(*The Gomeril*) テキスト入手不能につき、梗概を省略

1909年4月29日、ダブリンのロトゥンダ (the Rotunda) の大コンサート・ホールにおいて、結成したばかりのアイランド劇場 (the Theatre of Ireland) によって初演された。農夫とオールド・ミスが登場する1幕の笑劇であるらしいが、当時の劇評は酷評を掲載し、ホロウェイ¹²もまた、愉快的な北アイランド寸劇だが、『のらくら者』や『道の曲がり角』にはとうてい及ばない笑劇であると述べている。ベルファーストでの上演が見送られるほどの失敗作だったようである。

⑤『万軍の将』(*Captain of the Hosts*) テキスト入手不能につき、梗概を省略

1910年3月8日、ベルファーストのグランド・オペラ・ハウスにおいて初演された。長い台詞や展開から逸れる部分を削って簡潔に改訂したものが、1916年12月13日に同劇場で『ニール・ギャリーナ』(*Neil Gallina*) と改題されて再演されている。主人公ギャリーナは結核で余命6ヶ月と死期が近いことを知り、酒や放蕩に耽るが、福音主義伝道師の娘バーバラ (Barbara) に恋をして熱烈な福音主義者となるが、その片思いは成就せず、また本意をさぐるべく、彼女が伝道の道を1年間離れると告げるや、彼はもとの放埒な暮らしに戻り、「万軍の将」すなわち「死」に屈する、という3幕の悲劇であるらしい。恋愛と宗教の問題を扱った、ショー的な観念劇であるとの批判もあり、アルスター文芸劇場のレパートリーになることはなかった。

⑥『赤い泥炭』(*Red Turf*) 1幕の戯曲

1911年12月5日、ベルファーストのグランド・オペラ・ハウスにてアルスター文芸劇場に

よって初演。

アイルランド西部の沼地にある農夫の台所。時は現在（1911年）のある日の正午。奥の部屋では子どもを寝かしつける子守唄の声。ドアを叩く音がして、メアリー・バーク（Mary Burke）が応対に出ると、近所のジョン・ヘファナン（John Heffernan）老人が灯心草（イグサ）の包みを小脇に抱えて立っている。メアリーはジョンを中へ招き入れて挨拶を交わす。ジョンの用件は、山羊の乳が濁れてお茶に入れる乳がないので無心に来たというものだが、容器が大きくても小さくても気遣うので、手ぶらで訪ねて来たと言う。

メアリーは、社保庁の役人みたいに老人・貧乏人にけちな態度はとりません、と言って甕^{かめ}から牛乳を缶に満々と注いでやる。夫の所在を訊かれた彼女は、夫マーティン（Martin Burke）なら、アスンライ¹³（Athenry）から来る役人と技師を迎えるためにバリンリー（Ballinlea）の十字路にいると答える。ジョンがそれを聞いて、バーク家とフラナガン家の土地争議の解決には地図が決め手になると言ったノーラン神父（Father Nolan）の話や、フラナガンの父親がバーク家の隣の地所を購入した際に、沼地の泥炭採掘権保証書（a promise of turbarry）を貰っており、地代査定局（rent office）でその地図を見せられたと言うフラナガンの話を紹介すると、メアリーはなにがあっても自分の土地は死守する覚悟だ、とかっとなってやり返す。

ジョンは、10年前にゴールウェイ州の地図から消えていた1エーカーの土地を探しに来た工兵たちがそれをジョン・ハヴァティ（John Haverty）のジャガイモ（*puttas*¹⁴）畑で見つけたという逸話を持ち出し、地図という紙切れ一枚で口論や喧嘩が決着するのは素晴らしいことだ、と地図を高く評価する。

メアリーはそれには答えず暖炉に新しい泥炭をくべる。するとジョンは、その黒石泥炭は燃えるとすごく赤い色になる上等な泥炭で、〈係争中の泥炭はいつも赤く燃える〉という言葉を持ち出す。係争中ではなく本来、自分の物だと反感を示すメアリーに、ジョンは持参した灯心草の中に隠し持っていた旧式の猟銃を差し出し、沼地で猟をするほどもう若くもないし、猟銃使用登録料が本年は未納付なため、検査官や巡査に銃声を聞かれるとまずいから、と言って、その装填済みの猟銃を提供する。今日の牛乳のようにメアリーから世話になってきた恩返しの意味もあり、野ウサギや雷鳥を夫のマーティンに仕留めて貰えれば、という配慮である。ジョンは銃をテーブル横の壁にもたせかけ、再度礼を述べて立ち去ろうとする。ちょうどそのとき、マーティンがフラナガンたちとこちらに向かう姿が見えるのを知らせ、ジョンは退場。

メアリーがお茶の支度に急いでとりかかると、人の声が近づき、短気なマーティンが怒鳴る声とそれを嘲笑うフラナガンの声が聞こえる。小柄で筋張ったマーティンが、酔って激怒した様子で登場。

彼の説明によれば、彼らが所有する肥沃な盛り土の土地のうち、大半をフラナガンに、隅っこにある残りの赤い泥炭の湿地を彼に与えるという裁可が地図を拠り所にしてなされたのだという。先祖代々の土地で、しかも自分の持参金の一部でもあった土地を、このまま手をこまねいて明け渡すのか、地図だの神父の話などに唯々諾々と従ってこのまま引き下がるような腰抜けなのか、とメアリーは激しくマーティンに食ってかかる。嫁ぐ前に父親から「20鋤もの深さがあり、向こう百年に渡って炉の火をともしだらう石の泥炭」（Stone turf, twice ten spits deep that would keep the hearth lit for a hundred years.[109]）を譲り受けたのに、これからは、ジャガイモを茹でる泥炭を恵んで下さいとフラナガンに請わねばならないのか、父親が生きていればこんな仕打ちは絶対に受けなかった、あんたが腑抜けなのを見抜かれたからこんなひどい目に会っているのよ、と夫の甲斐性のなさをメアリーはなじる。

そこへフラナガンの息子（Michael Flanagan, the younger）が顔を見せ、彼の父親がマーティンとさしで話があるから来てくれ、と伝える。応じようとするマーティンを呼び止め、用があるなら本人が訪ねてくるべきだ、メアリーは拒否する。フラナガンの息子は、「ティンカーのような口ぶり」（tinker's tongue [110]）のメアリーに用はない、と侮辱して、ドアを激しく閉めて出ていく。

妻を侮辱されても平気なの、とメアリーは怒るが、今晚、精進（the station）予定のマーティンは祈りの言葉を唱えて十字を切り、もう罵り合いはやめよう、と諭す。あんたとはもう話しても無駄だわね、とメアリーは辛辣に切り返す。奥で子どもの泣き声がして、メアリーはそちらへ向かう。彼女のあやし声と子守唄が聞こ

えてくる。

マーティンは立ち上がり、ドアを開けて外を見る。父親の方のマイケル・フラナガン (Michael Flanagan, the elder) が登場。彼は残りの土地もマーティンから取り上げようという魂胆で、応じないならば骨の1本もへし折るような暴力も辞さない、と威嚇し、侮辱的に指を鳴らして、マーティンなど屁とも思わない、と嘲って立ち去る。

怒りに震えるマーティンの目に、ジョンが置いて行った猟銃が止まる。彼がそれをつかんだときに、メアリーが戻ってくる。彼女は危険を察知して銃を置くように言い、子どもの寝顔を眺めれば邪心は消えるからと、奥に行くように諭す。しかし、さきほどの夫婦喧嘩でメアリーの辛辣な言葉に深く傷ついていたマーティンは、銃があればフラナガンにしろメアリーにしろ、もう自分を愚弄することはできず、俺の事を怖がるだろう、と笑う。

戸外で馬車の音とフラナガン親子の叫び声がする。しがみついて押しとどめようとするメアリーを振り払い、彼女を台所に押し込んで、彼は外へ飛び出す。

マーティンの銃撃の挑発に答える嘲笑が聞こえたあと、銃声が1発とどろき、息子のフラナガンがあげる恐怖の悲鳴が聞こえる。メアリーはドアの方に向かって倒れ、奥からは子どもの泣き声。ほかにはいっさい物音はしない。幕。

メアリーは『誓約』のマカイ夫人と好対照をなすだろう。妻が示す夫への態度が、いかに夫を蛮行へと駆り立ててしまうか、敬愛を欠く、心ないひと言が男のプライドをいかに傷つけてしまうか、見事に描かれている。

標題の「赤い泥炭」は二重の意味が込められている。1つは、裁定によってバーク夫妻に与えられることになった、不毛の赤土成分の泥炭であり、もう1つは、黒い良質の泥炭だが、土地争いの怨念でめらめらと赤く燃え上がる泥炭である。

ホロウェイによれば¹⁵、この作品は「メロドラマと罵詈雑言を粗雑に試みただけのもの」で、「畜生」という言葉 (“damns”) がアビー劇場では当節流行しており、『のらくら者』や『道の曲がり角』が楽しみだけを与えてくれたことを思うと、哀しくなる劇だと記している。テキストを読む限りでは“damnation”が1度使われているだけなのだが、ホロウェイの観劇した折には、俳優たちがテキストを無視して、あるいはアドリブでこの罵り語を乱用したのだろうか、腑に落ちない記述である。

⑦『もし仮に！』 テキスト入手不能につき、梗概を省略

チェックリストによれば1913年11月25日、テキストの解説によれば同年12月5日に、ベルファーストのグランド・オペラ・ハウスにおいて初演。1914年12月にはダブリンのゲイアティ劇場で再演された。

アルスターの港町ポータホイ (Portahoy) のオレンジ会員たちが推すユニオニスト候補者シルヴェスター大佐 (Colonel Sylvester) は、〈もし仮に〉、敷地が無償提供されるならば、オレ

ンジ会館建設費用として2,000ポンドを投じるという公約を発表する。たまたま敷地に適する土地を所有していた地元ホテル勤務のウェイター、トム (Tom) は、大佐当選の暁^{あかつき}にはその土地を提供するように迫られる。婦人参政権論者たちは水道に毒を入れて投票妨害を画策するものの、トムの願いも虚しく大佐は僅差で当選を果たす、という3幕の政治的笑劇であるらしい。スィルヴェスター大佐をメインみずからが演じ、オレンジ会の党派主義を風刺的に描いた珍しい政治劇であると同時に、ポータホイのホテルが舞台であること、トムという名のホテル給仕、短気な大佐といった配役は、メインの後期戯曲『ピーター』において再び活かされていることが分かる。

⑧『^{たそがれ}黄昏』 テキスト入手不能につき、梗概を省略

1914年3月2日、ベルファーストのグランド・オペラ・ハウスにおいて初演。それに先立つ1913年12月31日、アイオナ・プレイヤーズ (Iona Players) によってダブリンで私的に上演された記録があるとのことで、「1幕のダウン州の小さな劇」の副題が添えられている。

夏のたそがれどき、年老いた農夫ハンス・マラン (Hans Mullen) が、体力の衰えを自覚して息子のジョンに一家の主の立場を譲ることを決心する話で、人物造形における心理的現実感に難があると指摘されている。

⑨『工業』 テキスト入手不能につき、梗概を省略

1917年12月6日、ベルファーストのグランド・オペラ・ハウスにおいて初演。アルスターのタバマリー (Tubbermurray) の町にアメリカ人企業家マクロフリン (M'Loughlin) の工場が操業を開始する。工場に隣接する土地に住むレイディ・ロフトス (Lady Loftus) は、工場の騒音や汚染を嫌い、工員マクナミー (McNamee) を唆して、ストライキや工場爆破を実行させる。工場は破壊されたものの、運よくマクロフリンは難を逃れ、損害賠償保険金を得て、この町を去る。早晩、工業化の波は止めようがない、というメッセージが託された作品で、工業と農業、近代化と伝統、工員と地主、経営者と労働者といった対比が明確なため、その後10年ほどの間、アルスター文芸劇場のレパトリ作品となったという。メインみずから、主役のマクロフリンを演じた。

なお、この作品の「プロローグ」と思しきテキスト¹⁶は入手できたので簡単に紹介しておきたい。タバマリー村の石橋の塀に老人と旅の若者がいて、郵便列車が通過する音が遠くから聞こえる。老人は、30年前は列車がこの村に停車するほど賑やかで、工場の黒煙が空を暗くしていたと、往事を偲ぶ。しかし、人間は工業で労働はしても生活はできないし、工場の機械の騒

音よりは鳥や虫の音の方が幸福なはずだ、としきりに自分に言い聞かせるかのように語り、やがて二人ともまた寝入ってしまう、という3ページ足らずの短いプロローグである。

⑩『幻影』(Phantoms) 1幕の喜劇あるいは悲劇

1923年11月28日(テキストには日付不詳の12月初演と記されているが)、ダブリンのゲイアティ劇場にて初演。

青銅器時代ごろ。急峻な山腹にあるヌーの鍛冶場。舞台の片側に鍛冶場小屋、もう片側には突き出した岩場、背景には石の壁があり、下り峠へと通じる裂け目(gap)がある。

老女ハグ¹⁷・ユー(Hag U)が岩に座って火にかけた鍋をかき回し、ときおり香草を混ぜている。小屋の外では亭主のヌー(Gnu)が金属を槌で鍛える音。ヌーは原始武具を作る男で、石の壁あたりには矢柄や石塊が無造作に並べられている。裂け目付近の石壁の上には、この老夫婦の奴隷¹⁸(bondsmen)ダノン(Danon)が座っていて、槍に刃をつける作業をすべきところを、フルート¹⁹を静かに奏でている。

夏の夕闇が迫る頃。仕事をサボっているダノンをハグ・ユーがたしなめると、槍先作りと人殺ししか能のない戦士よりも自分は羊飼になりたい、と口答えする。ハグ・ユーは壁の方に行き、ゴキブリ(black beetle)をつかまえ、鍋を攪拌させていた菜箸で触れただけでゴキブリは死んでしまい、毒薬の即効性に喜ぶ。

亭主のヌーが疲れた様子で入ってくる。彼は節くれだち、鍛冶仕事で真っ黒な外見。この日は6本の槍を仕上げたと言い、部族長の「青い谷のスイーキ」(Seeki of the Blue Valley)とまた物々交換に使うらしい。しかし、スイーキから手に入れた仔羊の一头は病弱で、不良品を押しつけられたことをダノンが匂わせる。ヌーはハグ・ユーに毒薬の調剤具合を尋ね、蠅が殺せる程度ではまだ駄目で、魔法使いに教わった処方箋に従うように言う。

突然ダノンが、叫び声が聞こえたと緊張し、無法者ガウラン(The Gowlan)の家にひと気がなく、ガウランの牧牛は湖岸におらず、山上の羊には羊飼いがついていなかった、と昼間目撃した異変について語るが、ハグ・ユーは気にとめない。鍋をかき回す妻の姿を見ながらヌーは、毒薬作りは果たして賢明なことだろうか、疑問を洩らす。しかし、ハグ・ユーは武具で殺すのも毒薬で殺すのも同じこと、あんたは人殺しの道具の売買で生計を立てているのではないかと反論する。実際、先月は槍先20本と引き換えに乳牛2頭に仔羊3頭をガウランからせしめたことをヌーは認める。商売上手のハグ・ユーはその事実をガウランの敵であるスイーキに知らせて警戒心を煽り、昨晩は彼から戦斧^{せんぶ}(battle-axes)20丁のお買い上げにつながったのだが、ヌーはそうした裏事情を知らなかったらしい。

青い谷の兵士たちが上げる叫び声が聞こえた、とまたダノンが告げるが、ハグ・ユーたちには聞こえない。自分が若くて美人だったら、ガウランやスイーキのような逞しい男に惚れるののだが、ガウランには妻や子どもたちがいるし、とハグ・ユーは言って、ヌーを邪険に小突く。ハグ・ユーはヌーの持っていた槍先を毒鍋のなかに浸してから返し、それを使って病気の仔羊で毒の効き目を試してみるように促す。羊が死んだ場合を案じるヌーに、効き目があるならいくらでもまた仔羊が手に入る、とハグ・ユー。

今日はずっと戦傷者の悲鳴が聞こえ、亡骸の骨をついばみに驚が次々と舞い降りているとダノンは怯える。毒薬の試験を終えたヌーが戻る。かすり傷程度でも絶大な効果を発揮したことをハグ・ユーに知らせ、彼女も確かめに行く。

ダノンは外に人影を発見する。ヌーも壁に寄り、襲撃者が敵の牧牛を追い立てている、と妻を呼ぶ。戻ってきたハグ・ユーは、ガウランの家が炎上して煙が上がっていること、どうやら槍よりも戦斧の方が効果^{てきめん}観面だったようで、ガウランから乳牛を貰っておいてよかった、もう略奪もできまい、とほくそえむ。ガウランが死んだとすればもはや武具を買い取る者もおらず、棍棒や毒薬も処分してかまわない、スイーキが一家皆殺しを宣

言していた以上、ガウランの妻や娘たちも生きてはいまい、と嘆き、とりわけハリエニシダの茂みから見とれたこともある、羊飼いの手伝いをしていた美貌の娘スィーヴァ (Seeva) の死を年甲斐もなく惜しむので、嫉妬して唾を吐き散らすハグ・ユーと言い争いになるが、ヌーはすぐに治めて、死んだ仔羊の皮を妻と一緒に剥ぐために、退場。

警備を任されたダノンの耳に、咽び泣きが聞こえてくる。誰何に答えたのは、他ならぬスィーヴァで、ダノンは裂け目を抜けて彼女を支えながら連れてくる。恐怖に慄く彼女は、追っ手のスィーキから匿ってほしい、と懇願する。ダノンは彼女を棍棒の後ろにある岩の隙間に押し込む。

人声を聞きつけたヌーが顔を出すと同時に、乱暴に戸を叩く音がして、スィーキが門を開けるように迫る。遅れて戻ってきたハグ・ユーは、両手を縛って輪縄をかけた状態なら入れてもよい、とダノンに命じる。やがて、蓬髪で野人のスィーキが、ダノンの引く輪縄を首にかけられ、両手を縛られた恰好で登場。ただし、縛られた手で赤い腰帯 (girdle) をつかんでいる。

彼は、ハグ・ユーがガウランに武具を売っていたうえにガウランを匿っているとして、来る途中の道でつまずいた腰帯——ガウランの物と思い込んでいるが、女物だとハグ・ユーは指摘する——を示す。ヌーは、ガウランはここにはいない、いれば雄牛20頭と引き換えにあなたに売りつける、と答える。昨夜未明、ガウランが10人の仲間を連れてスィーキの山城 (dun) を襲撃したが、前もって配慮していたので難を逃れたのだ、という事情説明に、自分が提供した武器情報と戦斧のお陰ではないか、と恩を売るハグ・ユー。妻子は家もろとも全員焼き殺したが、逃走中のガウランを鷹の餌食にするまでは枕を高くして眠れない、武具調達にやがてヌーのもとに来るかも知れない、とスィーキ。若い娘スィーヴァも焼死したと聞いたハグ・ユーは、若い者が死ぬのを見るのは老いた者の愉しみだ、とスィーキの蛮行を褒めたて、老女の乾いた心さえ揺さぶるような屈強な男ガウランの魅力や、火炙りの炎の魅力について語りだすと、そこからついさつき逃れて来たばかりのスィーヴァは思わず呻き声をもらす。

彼女は棍棒の覆いを倒して隙間から姿を現し、スィーキは啞然として彼女を見つめる。家族皆殺しではなかった訳だわね、と嘲るハグ・ユーに、ガウランの子種は絶やさねばならぬ、と縄を解くようにスィーキは訴える。娘との交換条件をハグ・ユーは要求するが、スィーキが応じないため、彼女はダノンに命じて、スィーヴァを逃がす。ハグ・ユーは流水で10度も焼入れをした切れ味鋭い斧をスィーキに売りつけ、彼はガウランを今晚仕留められたら奴の家畜を斧の支払いに当てると約束し、ヌーに連れられて退場。

武具を作る者が哀れみを抱いていたら仕事に専念できない、とハグ・ユーは、娘を匿ったダノンに説教し、スィーキに追われるガウランやスィーヴァ、飢えと渇き、怒りと苦しみと疲れと憎しみで燃え盛りつつ、これから幾晩も逃げ続ける二人を思い浮べては大笑いするだろう、と非情にも言い放つ。

遠くで叫び声。ヌーが戻り、縄を解かれたスィーキが早速に部下を呼び寄せている声だと説明する。別の物音がしてヌーは^{かんぬき}門を確かめに出て行く。ダノンも谷の羊の様子を見に行かされる。

裂け目からヌーとガウランが現れる。ガウランは壁に手をつきよろめいており、憔悴している。彼は妻も子どもも家も家来も失ったことを言葉少なに語る。すっかり変わり果てた様子を見て、いまや彼は肉の塊で魂は死んでいる、とハグ・ユー。彼女はスィーヴァの腰紐を手渡し、娘が死なずに生きていることを知らせ、スィーキが部下と合流する前に男らしく戦え、とけしかける。搜索隊の声が近づき、ガウランは槍をつかんで裂け目に向かい姿を消す。逆上した男たちの戦いに胸をときめかせるハグ・ユー。

ヌーは夕食の支度をハグ・ユーに命じる。妻の後ろ姿と鍋を眺めているうちに、邪悪な考えが閃く。おりしもダノンのリュートの調べが流れてくる。ダノンは実は、スィーヴァを逃がしはせずにこっそり匿っていたのだ。ヌーは、高嶺の花と思っていたスィーヴァは俺のものだ、と悪意のある笑い声を上げて、サンザシの小枝を折って作った刺し棒 (goad) を鍋に浸け、ハグ・ユーを呼び寄せる。夜寒でかじかんだ手を火にかざしたハグ・ユーの手首に、ヌーは、これで暖まるぞ、と刺し棒をいきなり突き刺す。彼女は悲鳴もあげずに、壁の方に向かって倒れ、動かなくなる。

ヌーは好奇心にかられて彼女に近寄り、顔を眺める。いきなり、ハグ・ユーは起き上がり、近くにあった槍でヌーを刺す。彼はそばに倒れて絶命し、ハグ・ユーも、こんな茶番を他人に見られずに済んでよかった、と

言って息絶える。

明かりが次第に弱まる。裂け目にダノンとスィーヴァが登場。すぐに、スィーキの使者の声がして、ガウランが死んだので約束の品を明朝受け取りに来るように、との伝言を届ける。父親の訃報はスィーヴァの耳にも達している。彼女は父の敵のスィーキのもとに参上しないようにダノンに訴え、スィーヴァを連れてここから逃走し、もう武具は作らないことをダノンは誓う。二人はヌーとハグ・ユーが死んでいるとは気づかないまま、年寄りだからそのまま寝かせておこう、と放置する。ダノンの膝枕になってスィーヴァは楽器の演奏を求め、ダノンは優しい調べを奏でる。幕。

標題の *Phantoms* は、「オペラ座の怪人」(*The Phantom of the Opera*) のように「幽霊」「お化け」の意味でも使われるが、舞台に死者の亡霊が登場するわけではない。青の谷で迎え撃ちに会ったガウランの家来たちの死骸やガウランの妻子の焼死体などへの連想、あるいは幕の最後近くで殺し合った老夫婦の死体などは、複数形の「幽霊たち」に適合するのだけれども、作者が青銅器時代という太古に時代設定して現実の輪郭をぼかしている意図を汲み取って、抽象的な「幻影」を訳語に当ててみた。

ハグ・ユーの見せる、若さへの異常な嫉妬心、「武器商人」稼業にこめられた社会批判など、ところどころ印象的な台詞や展開はあるのだが、一幕劇の制約で十分に掘り下げられていない憾みは否めない。突然リビドーに目覚めたかのように、老妻を毒殺して若い小娘と懇ろになろうとたくらむヌー老人や、屈強な男への憧れ・欲望をしきりに口にしては、若さを羨み、若い生命の破滅に愉悦を感じるハグ・ユーが、時差のある相討ちになる形で横たわる幕切れは、老醜に対する若さの勝利を肯定し、ダノンの武器製造放棄宣言は、軍事にまさる芸術や愛の力を示している。

ちなみにハグ・ユー役を演じたのは、メインの妻ジョウゼフィーンである。

⑪『ピーター』(*Peter*) 3幕にプロローグとエピローグ付

1930年1月28日、ダブリンのアビー劇場においてアビー劇団によって初演。演出はレノックス・ロビンソン (Lennox Robinson, 1886-1958)。プロローグとエピローグは主人公が目覚めている時の物語で、戯曲の中心は夢のなかの出来事という凝った構成をとっている。

プロローグ アイルランドの工学部大学生ピーター・グレイム (Peter Grahame) のみずばらしい下宿。午前1時。2人の友人が帰り、ピーターは肘掛け椅子に座ってネクタイや靴、穴あき靴下をとり、寝室に入って消灯する。暗転。

第1幕 同じ下宿に夏の朝の明るい日差しがさしこむ。昨夜の友人チャーリー (Charley Prendergast) とビリー (Billy Stephens) が訪ねて来て、まだ寝ているピーターを大合唱で起こそうとする。下宿の女中ロウズィ (Rosie) が朝食と手紙をお盆に載せて現れ、穴あき靴下をこっそり拾い、ピーターへの朝食を置いていく。

着替えをして出てきたピーターはリートリム州のジョウ叔父 (Uncle Joe) からの手紙を読む。卒業試験不合格だった彼に、技師になる才能がないならすぐ実家に戻ってくるようにとの内容である。ピーターは怠けていたことは認めながらも、工学とは関係の薄い地質学 (三葉虫などの化石を扱う) でマクメナミン (McMenamin) 教授に落とされた他はまずまずの成績だったはずだと残念がる。

ロウズィが、下宿の女将マーフィ夫人 (Mrs Murphy) からの先月分の家賃 (6ポンド10シリング) 督促状を持って現れ、すぐ返事が欲しいと伝えるが、靴下が片方見つからないから行けない、とピーター。ロウズィはすぐに繕ってから渡すつもりで預かっていると答え、ピーターはのちほど自ら女将のもとへ行くと約束してロウズィを下がらせる。ピリーは、悪い事は重なるものさ、と両輪が次々パンクした経験を語り、サム・パートリッジ (Sam Partridge) というバリーミナ (Ballymena) 出身の金持ち (the Dives²⁰) がピーターの噂をしていたと知らせる。サムは去年みんなにご馳走をしてくれたのだが、ピーターは忘れてるらしい。

書棚の本を拾い読みしていたチャーリーは、ピーターが余白に描いた女性の顔と賞賛の言葉を見つけて冷やかかし、昨日青の大型クライスラー車で通りかかってピーターに会釈した女性だと気がつく。ピーターは自分たち若者をいいなりに操る試験官や雇用主は年寄りばかりだが、若い美女と付き合うのは若者の専売特許だと、興奮気味にまくしたてる。本棚を物色していたチャーリーは、『港湾・波止場・運河』という標題の40ポンドもする高価な専門書を見つけ、その本に「ジョウンからピーターへ」の書き込みを発見する。下宿代6ポンド10シリングを工面することはできないが、この専門書を1ポンドで買ってほしい、というチャーリーの申し出を断り、青のクライスラーの女性はこのジョウンであると明かす。地質学の勉強に精を出して石英標本を探していたら彼女の車にはねられそうになったのがきっかけだ、というピーターに、二人はその後の成り行きを面白おかしく推測して語って聞かせる。

流としたなりの中年男サム・パートリッジが登場。彼は饒舌に喋り続け、去年のサッカー懇親会のおりにピーターが見せた様々なダンスの妙技が鮮烈に印象に残っており、ぜひとも自分の経営するポータホイ (Portahoy) のエクセルスィオール²¹・ホテル (Excelsior Hotel) にホスト役として勤務してほしいと提案する。自然の美を生かし、豪華に改装された設備、6コースからなる朝食などの豪華な食事が売り物だが、年寄りのための高級トルコ風呂のような沈滞した場所ではなく、活気溢れる空間にするために、たとえば客の依頼に応じて昼間はゴルフやクロウケー競技をしたり、夜にはピアノで演奏したり歌ったり踊ったりして娯楽を提供する仕事内容で、とりあえず彼を2週間試用したいという。

寝室に行き、ピーターが思案している間に、サムは彼の延滞家賃を払うようにビルたちに指示する。戻ってきたピーターにサムは、食事と住居付きで週給5ポンドの条件を提示した後、内密に私的な依頼をする。それは、2年来ホテルに来ているある若い女性との仲をとりもつべく、場をお喋りで盛り上げたあとで、気を利かせてその女性と二人きりにする、といった依頼である。

ロウズィが繕った靴下と女将からの領収書のメモを持ってくる。滞納家賃を弁済して貰ったことを知ったピーターは、感激してサムの就労勧誘を受け入れる。ホテル案内資料を渡し、明後日からの勤務を言い渡して、サムは立ち去る。幕。

第2幕 数日後のエクセルスィオール・ホテルのラウンジ。礼服姿のサムが、千鳥足の恰幅のいい紳士スコット ([Seosamh] Nelson Scott) を年配のウェイターのトム (Tom) とともに案内している。スコットはラウンジからの眺望が絶景であるのに望遠鏡がないことを残念がり、ラウンジの名称を「居眠りの間」(snooze parlour) から「午睡室」(Siesta room) に改めるべきだと指摘し、サムはトムにメモさせる。たらふく食べてクッションをあてがわれたスコットはそのままたた寝を始める。

ホテルの宿泊客で退職した店主マクリーー夫妻が現れる。夫のジョン (John McCleery) は詩作の手帳を、妻のアン (Ann McCleery) は大きな毛糸球を携えている。ジョンは「沼」(bog) と韻を踏む語を思案しており、スコットの安眠を妨げたくないサムは、この老夫婦に大広間への移動を勧めるが、二人はこのラウンジの方が落ち着く、と断る。サムはトムに、45号室のアメリカ人女性客ヴァン・デ・マイツァー (Miss Van de Meizer) に格別の配慮を払うこと、昨夜の余興でのピーターの歌は活力に乏しく今夜は気合を入れること、ス

コット氏の接待を落ち度なくこなすことなどを指示して退場。

目覚めたスコットはトムにウイスキーを注文する。遠くからサイレンが聞こえ、作業準備と作業開始を意味する2回のサイレンを港湾工事現場で鳴らすことをトムは説明し、サムはまたまどろむ。夫妻からサムについて訊かれたトムは、「星」を扱う点では天文学者さながらの職業、つまりホテルの格付けを4つ星を最高基準にして評価する、旅行代理店連合推奨ホテル主任視察員であり、高い評価を得るために接待中なのだと知らせる。

少年給仕がやってきて、今晚の余興のチラシを配布して退場。アンはそれを見て喜ぶが、詩作に余念のないジョンは見向きもしない。

宿泊客到着のざわめきや爆笑がきこえてきて、トムは慌てて一行を別の場所へと誘導する。チラシを読んでいたアンは、出し物の演目を眺め、昨夜も堪能したピーターが出演と知って、夫の義妹のいとこによく似ているとの感想をもらす。

そのピーターが慌てて登場し、スコットの投げ出した足で転びかける。彼は一緒に「賭けゴルフ」(昼食抜きで、2試合分36ホール)をした宿泊客のインド陸軍将校・ブレイク大佐 (Colonel Blake) に支払うべき2ポンドをトムに立て替えてもらいに来たのである。トムは紙幣とともに、サムから言付かっていた伝言——マイツァーへの配慮、6時半からの稽古と今晚は気合をいれること——を伝える。

大声でブレイク大佐が現れ、トムは別の広間を勧めるが、聞き入れられないので、安眠中のスコットからなるべく離れた場所へ案内する。ピーターは賭け金2ポンドを大佐に支払い、彼は明日もまたゴルフをしようと誘う。25年間インドで軍に勤務し、戸外での活動が好きな大佐は、ピーターが余興で歌が歌うことを軟弱だと不興がり、インド時代の工兵でジョーダン (Jordan) という男にピーターが似ている、と思い当たる。大佐はまた、港湾工事現場への夕食後の散歩をピーターに勧める。実はその工事請負会社の会長に選出されていたのである。彼の姪のジョウンが『港湾・波止場・運河』の専門書を読んでいるのを見て仰天したことも大佐は語り、ホテルの余興係という中途半端な仕事ではなく、もっと実務的な職に就け、と諫める。

サムが戻り、スコット氏への葉巻をトムに命じ、ブレイク大佐には会長就任を報じる『タイムズ』紙を手渡す。サムはピーターを呼び寄せ、ゴルフで最終ホールのパットをわざとはずして逆転負けしたのは知っているが、連日2ポンドも出費するようでは割に合わない、と注意する。そして、採用時に話した、仲を取り持てほしい女性とは大佐の姪ジョウンであると打ち明け、ピーターが陸まじく踊って接待すべきはジョウンではなく、その叔父や叔母の大佐夫妻の方だ、と釘を刺す。この告白にピーターは衝撃を受けるが、立場上彼は文句をいうことはできない。

加減の悪かったブレイク夫人のメアリー (Mary) が登場。大佐はピーターを紹介する。遅れて、20代初めの美女ジョウンが登場。自分の客室の窓からの眺望は最高だと褒め、別の窓からはちょうどこのラウンジが見下ろせる、とピーターを連れて自室を示す。(一方、大佐夫妻の客室は、大佐が眺望にはこだわらず、窓の大きさだけをリクエストしたために殺風景だ、と夫人は不平がる。)

庭園を散策したいという夫人をサムは案内して退場。トムが葉巻を用意して登場。スコットが驚掴みにしてポケットに入れるのを見た大佐は、なくならないうちにと自分も一本取って吸い始める。トムは大佐に小声で、スコット氏は糖尿病の病人なのでそっとしてくれるように頼み、彼の注意をマククリーン夫妻へと向けさせる。

大佐は夫妻と挨拶を交わし、「アルスターの詩人」とトムから紹介されていたジョンに自作の詩を披露してくれるように頼む。『ホイッグ』や『ベル』誌に寄稿掲載の実績もあり、詩集出版も考慮中というジョンは、イエイツの詩風を真似たという詩を読み上げ、大佐は称賛する。別の詩の朗読を所望する大佐に、実はまだこれだけだ、とジョンは答え、大佐は即興で下らない散文詩めいた言葉を連ねて、暗に詩作よりも妻の編物の役に立つ工夫でもすべきだと語り、居眠り中のスコットを叱咤して、妻と姪の後を追って退場。

トムはあわてて駆け寄り、美食家のスコット氏と違い、大佐はチキン・カレーばかり食べて肝臓障害のために粗野なのだととりなし、また安眠できるように世話をやく。

夫人はトムから、ピーターの鞆の荷札にアントリム州バリーワイルダー (Ballywilder) と書かれていたことを聞き出し、ピーターは夫の義妹のいとこと駆け落ちしたジョン・グレイアムではないか、と夫に尋ねるが、

大佐に詩作を邪魔されて憤慨している彼は関心を示さず、いずれにしても彼らはすでに他界しており、叔父のジョウ (Joseph Halliday) がその家に移り住んでいる、と夫人は記憶を修正する。実は夫人は昨日、このジョウに宛てて問合せの手紙を書いたのだが、夫ジョンは金銭高いヤンセン主義者のジョウとそりが合わない様子である。気分転換に夫人は夫を外へ連れ出す。

鼾をかいて寝ていたスコットはゴングの音 (食事開始45分前を知らせる合図) に目を醒まし、夕食前の散歩に出て行く。サムが大佐夫妻と登場。食事用の着替えに夫妻は退場。遅れてジョウンとピーターが到着。二人はクロムレッフ (Cromlech) からの美しい夕景を堪能していたらしい。ジョウンも自室に下がった後、サムは自分をまくかのようにジョウンと別行動をとったピーターを激しくなじり、もし自分とジョウンを争うつもりなら、借金を全額返済して出てゆけ、金も頭もなく、余興だけが取り柄の奴は人の恋路の邪魔をするな、と迫る。ピーターは反論もできず絶望的に従う。しかし、立去り際にジョウンの部屋の窓に彼女の姿を見かけたらしく、笑って手を振る。サムは対抗策を講じることを自らに誓う。幕。

第3幕 数時間後の、ホテルの別のラウンジ。ブレイク夫人が独りでコーヒーを飲んでいる。音楽が止み、踊っていたピーターと肥満体形のマイツァー、遅れてブレイク大佐とジョウンが登場。背景幕からサムが現れて、挨拶の口上と貴賓の子爵来訪や食事休憩の案内をする。少年給仕が18号室のマククリーリー宛ての電報を届けに来るが、トムはスコット氏の見張り役に徹するように注意する。

マイツァーはしきりにピーターのダンスの技量を褒め、アメリカ帰国前にアイリッシュダンスを習得したい、とピーターの指導を2日分予約する。ブレイク夫人は推理小説を読み自室へ、大佐は賭けブリッジ (1点につき半クラウンの予定が倍の5シリングに変更) をするためにジョウンから5ポンドを借りて、退場。

マイツァーは、アメリカの慈善組織「ヘルパー会」(Helpers' League) の団体観光客25人の下見役としてこのホテルに先乗りしている立場を利用して、ピーターの給与改善の力になりたい、と申し出て、二人はサムの所へ交渉に行く。

少年給仕に付添われてスコット氏が登場。トムは彼の部屋に子爵を通すようにサムから指示を受けており、こっそりと荷物の入れ替えを給仕に命じる。眼鏡をとり部屋へ戻ろうとするスコット氏をトムは制し、退場。ホテルでの至れり尽くせりの接待に上機嫌のスコットは、とりわけピーターを高く評価しており、呼び寄せたピーターに名刺を渡し、人生でもっとも大事なことはなんでも徹底的にやることであり、酩酊して居眠りばかりしているように見えても自分の目は節穴ではない、さる有名ホテルの知人に連絡をとり、返事の手紙を貰った、と切り出し、部屋の上着にしまい忘れたその手紙をとり、出て行く。

ジョウンはピーターに、技師を目指して専門書をねだった彼がその夢を捨ててホテルの余興係に甘んじていることを憂い、プレゼントした専門書を返してほしい、と要求するが、ピーターは応じない。トムが酒を持って戻り、スコットが自室に向かった、と聞いて愕然として後を追う。トムはホテル勤務までの顛末を説明し、工事現場のサイレンや構台が本当のことを打ち明けてジョウンの許しと別れを得るように呼びかけている、と真相を切り出しかけるが、折り悪くサムが来て、出演準備を命じられ、退場。

電報を読んだマククリーリー夫妻が登場し、やはりピーターは失踪中の親族であり、まもなく彼の叔父ジョウが駆けつけることを話す。スコットが少年給仕とトムに付添われて登場。運良く、スコットは途中で大佐と出会い、追いついたトムが眼鏡と手紙を探し当てて彼のポケットに押し込んだのだという。まもなくピエロの衣装をまとったピーターがスポットライトを浴びて登場し、やがて拍手喝采を受けて退場。スコットは有名ホテルからの週給10ポンドでの招聘状をピーターに渡し、返事は彼の部屋まで伝えにくるようになって退場。

演技を終えたピーターにマククリーリー夫妻は、自分たちは彼の親族だと伝え、叔父のジョウも電報で迎えに来ると送ってきたと知らせる。しかし、決して叔父のもとへは戻らない、とピーターは断る。

ジョウンがこっそり現れ、背後からピーターに目隠しをし、二人は抱擁する。サムが現れ、貴賓の接待に行くように命じ、ジョウンの前で、いかにピーターが落ちこぼれで、自分が借金も肩代わりして面倒を見ているかを暴露する。ピーターは事実だと認めて立去る。サムはなおも、ホテルの岩庭やフランス製の青い壁紙の客室はジョウンの好みに合わせて拵えたものであり、自分はジョウンのためなら全財産を投げ出してなんでも尽

くすから、役立たずで若さだけが取り柄のピーターなど諦めて、自分を選んでほしい、と訴える。答えを尋ねるピーターの声が溶暗する舞台に響き、選んだのはピーターだとジョウンは答える。暗転し、雷鳴が轟き、港湾のサイレンの鳴り響くなか、いったん幕がおり、再び上がるとともにエピローグに入る。

エピローグ 明かりが戻るとピーターが薄汚い下宿で寝ていて、ビリーとチャーリーが枕もとにいて、ビリーが号令用の笛をピーターの耳へ鳴らし、ピーターを揺すって起こす。今までの出来事がすべて夢物語だと悟ったピーターは両手に顔を埋めて泣き出す。しかし、チャーリーは彼が工学部の最終試験を3位の好成績（「波止場・港湾・運河」は特に優秀）で合格したことを報じる新聞を見せ、ジョウ叔父もまもなくここを訪ねてきて、リトリウム州にある貯水池の技師職を斡旋してくれ、週給7シリングが保証されるだろうことを告げる。しかし、約束の地に着くまでイスラエルの民が40年もかかって老いぼれたように、泥とイグサの土地の片田舎で暮す見通しに彼は心が晴れない。

チャーリーは玄関にあった手紙をピーターに手渡し、ビリーと外へ出る。手紙の差出人はジョウンで、エクセルスイオール・ホテルのパンフに次のような添え書きがあった。「合格者氏名を見て叔父があなたに港湾工事の職を勧めている。いま宿泊しているホテルの支配人はサムで、美しい壁紙の部屋をあてがってくれ、ジョーダンという名前の、踊って歌える芸人の学生を採用する予定とか。彼の写真を見せてもらって大笑いしたのは、あなたに瓜二つだったから。とにかく、いつまでも変わらず、あなたは私の恋人。」最後の台詞は夢の中で彼女が言ってくれたのと同じ台詞だ、とピーターは喜んで繰り返す。幕。

3幕全体が長い夢であったという構成は、「邯鄲の枕」の故事を彷彿とさせるが、科挙に落第した盧生の現実が目覚めた後もそのままなのに対し、ピーターは卒業試験に優等で合格して大団円に到着している点は著しい違いである。予知夢のように暗合するジョーダンやホテルの名前は人生や運命の不可思議さを象徴するとともに、いささか出来すぎていて現実感に乏しい印象も残すだろう。処女作『道の曲がり角』のロビーが彼の天分とも思われる音楽（フィドル奏者）の道を選び取ったのに対し、ピーターのエンターテイナーとしての資質は、結局はただの道楽に過ぎないものだったのか、という疑念も拭い去れない。工事現場のサイレンがピーターの心に強く訴えかけてきたという告白は、フィドルが僕を呼んでいる、というロビーの告白と通じるものがあるにせよ、サイレンの響きはあまりにもロマンティック性に欠けているように思えてならない。実学を貶めるつもりはないが、ロビーの孤高な芸術家としての面影をピーターのなかに感じられないのは、残念でならない。

⑫『橋頭堡』(Bridge Head) 3幕の戯曲

1934年6月18日、ダブリンのアビー劇場においてアビー劇団によって、レノックス・ロビンソン演出で初演。1939年5月19日、ロンドンのウェストミンスター劇場においてマイケル・マクオウワン演出で再演。

第1幕 アイルランド西部キルレイ (Kilrea) にあるムーニーズ・ホテル (Mooney's Hotel) のスティーヴン・ムーア (Stephen Moore) の居間。秋の日の午後遅い時刻。頑強で日焼けした白髪頭の中年官吏といった印象の土地視察官ムーアが机に向かい手紙を書いている。すでに書き終えた手紙は肘掛け椅子に載せてあり、彼は呼鈴で下僕のマーティン (Martin) を呼ぶ。白い口髭をたくわえた初老のマーティンは、手紙の宛名を眺めて、バリントン (Derimot Barrington) 氏宛ての手紙は本人がまもなく来訪予定であるから発送無用であることや、バリントンの娘からムーアの部下オニール (Hugh O'Neill) 宛の絵葉書が届いていることなどをムーアに伝える。

ムーアは、散歩がてら自分で郵便物を出しに郵便局へ行くと伝え、部屋の掃除と空気換えを頼んで退場。マーティンは机上に反故を見つけ、「オニール」「カーニー」の名が掻き消されているのに気づく。(どちらを僻地勤務に派遣するか、迷ったものらしい。)

ツイード服の青年オニールが元気に駆け込んでくる。マーティンは彼宛ての絵葉書 (ネヴァン山の薔薇園の写真) を手渡す。

大柄で豊胸の女性モリスィー夫人 (Mrs Marcus Morrissey) が来訪。オニールは席をはずす。散歩からムーアがおりよく戻ってきて、夫人はマーティンを人払いして、ムーアに土地の分配をめぐる現状や、従兄弟のパット (Pat Morrissey) が土地を得たことへの感謝、さらに別の親戚ジャックや二人の息子マイケルとジェイムズにも配慮を望むといった陳情を持ちかけるが、ムーアは応じない。

マーティンが登場して、ダブリンから日本人の来訪を告げる。衆議院議員イナリ・ゴ (ウ) スキ²² (Inari Gosuki) と名乗る小柄でこざっぱりとした人物で、アイルランドの土地問題の視察に抜き打ちに訪れたらしい。ムーアは星の比喩を用いて、小作農がひしめく「密集地域」(congested districts) の星を移動させなければ、やがて光が衰え消えてしまう、と農地改革の趣旨を説明する。

初老の紳士バリントン氏と20代の美しい娘セスイリー (Cecily) が来訪。イナリ氏を紹介されたあと、バリントンは自分の土地の没収と分配について抗議を述べる。アダゲール (Addergoole) 出身の余所者ドウラン (Dan Dolan) にムーアが土地を与えようとしていることで地元民から不満が起こっている。なぜなら彼らは土地を貰っても耕作方法を知らないか、すぐ他人に売却してしまい、分配の意味がないからである。大勢の小土地所有者たちに僅かばかりの土地を与えはしたが、もっとも良い土地40エーカーをこの余所者にくれてやるならば、なにも貰っていない牧夫の弟ジョン・モリスィー (John Morrissey) などが騒ぎ立てるのは目に見えており、自分の立場もなくなる、とバリントンは直訴する。

ムーアのもうひとりの部下で、眼鏡をかけた中年男カーニー (John Kearney) が登場。ドウランがどうしてもその土地を受け取ろうとしないことを伝えると、バリントンは喜ぶ。ムーアは郵送せずにおいたバリントン宛ての通知書——今月8日月曜の午前11時から彼の屋敷を検分し、没収の検討に入ることを示唆するもの——を読ませる。気丈にもバリントンは、その前日の昼食会にムーアたちを招待するが、ムーアは職務上、固辞する。バリントン父娘、退場。

ムーアは引出しから重要な地図を取り出し、ドウランの現所有地はランデイル (rundale) 配分法のせいでモザイク状に点在する70エーカーほどの土地であるが、シヴナ川 (River Shivna) 向こうの3,000エーカーのフィッツゴーマンズタウン農場 (Fitzgormanstown Ranch) 建設計画において、川に架ける橋の拠点 (文字通りの「橋頭堡」) として、収用することが不可欠な土地であることを明かす。

マーティンが現れ、イナリ氏に用のある人物がいると伝え、彼を連れ出す。その人物とは、日本人来訪と聞いて50倍のオッズの馬チンキー (中国人の蔑称) に賭けて大儲けをした、このホテルの支配人である。ムーアは外で待たせていたドウランをカーニーに連れて来させる。なぜ提示された土地を拒絶するのかとの問いに、セメント床の豚小屋がないことをドウランが挙げたので、ムーアは追加条件として豚小屋設置を認可する。さらに、牧夫小屋に隣接する牧草地 (これはパット・モリスィーに割当て済) や、ミース州の土地を移住先としてドウランは申し出るが、ムーアはこれを却下する。ドウランはまた、現在の同居家族は3人だが、アメリカや他の州に在住、あるいは自由国軍に勤務、精神病院に収用されている者など全部で10人いると話し、地代が26ポンドと高額なうえに、近隣の牧夫兄弟も愛想が悪い、と不満の数々を並べ続ける。

イナリ氏、続いて傘を忘れたという安易な口実でモリスィー夫人が再登場。紹介されたドウランに、現住地を離れると碌なことはないよ、と戒め、ムーアに土地分配での高配を再度願い出て、夫人は退去。

ドウランは交渉の最後に「地代16ポンドと牧草地付き」を主張するが、ムーアは取り合わず、別の農民に契約承諾書を発送するようにオニールに指示する。焦ったドウランは「地代17ポンド、牧草地なし」に条件を引き下げ、カーニーの温情を入れて、結局「地代20ポンド」で交渉は成立し、ドウランは契約書に署名する。ムーアはドウランを酒場でねぎらい、イナリにも農地分配の手続きを説明するように、カーニーに指示する。

残されたオニールにムーアは、「ひとたびシャノン川の西に行けば二度と戻れない」(“Once West of the Shannon, you never go back.”[206])という諺を紹介し、人事異動の予定があるから、もし勤務3年の若いオニールが都市部への異動を望むなら今晚中に申し出るようにと伝える。言下に否定するオニールに、ムーアは今晚の協議に出席するように指示し、バリントン家の者と深く関わらないように忠告を与える。ホテルに戻る前に交渉相手のオフラハティが経営するパブでオニールが飲んできたことを咎める口ぶりのムーアに対し、2時間もまずい酒に付き合ったお蔭で、20年間ムーアやカーニーが手を焼いていたオフラハティから合意の契約を取りつけたことを明らかにし、怒ってパブへと繰り出して行く。途中、ぶつかりそうになった下僕のマーティンは、若い頃のあなたをみるようすな、とムーアに微笑む。幕。

第2幕 数日後の夕方遅い時刻。戸外は暴風雨である。地図と別表を対照しながら、ムーアとカーニーの確認作業が続いている。町の時計が午後9時を打ち、カーニーは田舎の自宅で待つ妻エレン(Ellen)や子どもたちを気にして仕事の打ち切りを申し出る。カーニーの住む田舎町では、やれ水路が詰まっただの、瓦が大風で飛ばされただの、驢馬(donkey)でなく駄騾(けつてい)(雌ロバ:jennet)を放牧しているだの、つまり苦情が自宅に舞い込んでくる始末で、1870年代の代理人のように立派な事務所を抱えているわけでもない、とこぼす。

ムーアは、西の辺鄙な土地バリーナシーダ(Ballinasheeda)での業務を若いオニールに任せるつもりだとカーニーに明かす。ここはかつてマカータン(McCartan)という別の視察官が派遣されて精神に変調をきたし解雇されたほどの困難な土地である。

オニール、続いてイナリが登場。イナリは見知らぬ男から預かったという手紙をムーアに手渡す。それはドウランが日曜までにバリーグラス(Ballyglass)を去らなければ、彼とムーア、オニール用の3つの棺桶が必要になるだろう、という「月光隊長」(Captain Moonlight²³)名義の脅迫状であった。

バリントンが興奮して現れる。昨夜留守中に自宅から銃を2丁盗まれたことを告げ、土地委員会の収用方法が過酷で不合理だと訴える。収益の上がる土地を取り上げておきながら、残りの土地を耕作放置もしくは「一作間だけ転貸」(con-acre)すれば、それもまた耕作不適切として没収されてしまう仕組みだからである。抵当権者に有り金を奪われ、庭や屋根は荒れ放題、おまけにネヴィン山まで没収対象なのか、と嘆くバリントンに、ムーアはその土地の使用状態を客観的に考察すれば止むを得ないはずだ、と言いつ渡す。

大柄でどっしりした男モクラー(Maurice Mockler)が登場。彼もまた、バリーグラス住民を代表して、土地委員会の分割手続きが不当である旨の決議案を伝える。居合わせたバリントンに彼は、1920年には土地譲渡を表明しながら、その後撤回して控訴院闘争にまで持ち込んでいると非難する。そしてオニールには、ドウランという余所者を地元の合意なしに移住させたこと、ドイツ地主貴族ユンカーやイタリアのムッソリーニ顔負けの強制支配に対して、住民の徹底抗戦を表明する。

ドウランが飛び込んでくる。トネリコの杖でテーブルを叩きながら、豚小屋にまだセメント床が設置されていないのは約束違反だと食ってかかる。女房に朝飯を頼むときもそのように喧嘩腰なのか、とムーアは冷静に対応するが、移住先にあるスエズ運河ほどのばかどかい水路のせいで雌羊や雌牛が溺死し、低湿牧草地(cal-lows)や赤水と伝染病(murrain)の沼地といったひどい土地ではやっていけないから、契約を破棄してもとの土地に戻る、とドウランは主張する。

これを聞いてモクラーは喜ぶが、ドウランが翻意するや、彼を口汚く罵り、二人は一触即発状態となり、モクラーは最後通牒を突きつけて、退場。

一部始終を聞いていたイナリが、キリスト教徒なのになぜ諍(いさか)いをするのか、日本では狡猾さの象徴であるキ

ツネ（稲荷様）への崇敬をこめて社を祀^{やしろ まつ}っており、同様に智恵の象徴のネコ（Nakosama[sic], [218]）も崇敬する、と自国の風習を紹介するが、（ドウランの話に出てくる）豚はもっとも貪欲な動物とアイルランドでは見なされていると聞かされて、なるほどと納得する。

ムーアはセメント床を明日には設置するようにオニールに命じてドウランの抗議に応え、豚小屋の差し掛け小屋（lean-to shed）建設用の樅材（deal trees）調達という彼のあらたな要望も、バリントンの口添えを容れて、しぶしぶ承諾する。

ドウランは彼の豚小屋に貼られていたという脅迫状（イナリが手渡したものと同一）を示し、自分は正々堂々と自分の名前を添えた返書をモリスィーの鶏舎に貼り返してきた、と、モリスィーがこの陰謀の黒幕にいると主張する。モリスィー家の者は代々の忠実な使用者である、と雇用主のバリントンがそれを否定すると、モリスィーは仕留めた雉の4羽に1羽だけを主人のバリントンに差し出し、2羽を売り飛ばし、1羽を自分で食うようなひどい奴だとドウランは告発し、1881年にパーネルが地主階級を一掃した年が最高だった、と捨て台詞を吐いて退場。バリントンも、あらぬ嫌疑を受けると困るから、今後娘とは交際せぬようにオニールに言い渡して退場。イナリも2枚の脅迫状が同一内容であることを確認して退場。

ムーアはオニールに、バリントンの娘セスイリーに惚れているのではないかとオニールに問いただし、彼が否定するので、（カーニーと幕の初めに行っていた）土地分割の確認作業を始める。しかし、作業に専念できないオニールは、実はセスイリーに夢中で夜も眠れないほどで、数日前の晩（第1幕の終わり）に彼女と会った、と告白する。ムーアはオニールにバリーナシーダの土地や先輩マカータンのことを切り出し、明日からのバリーナシーダ転勤を命じる。オニールは遠隔地への突然の転勤命令にムーアの意図を訝る。

ドウランが再び登場し、彼が夜中に15マイル以上も歩いて自宅に帰ると知って、ムーアは車で送ることを申し出て、オニールには転勤地の関連資料を手渡す。ムーアとドウラン、退場。

手紙を書きかけたオニールのもとへセスイリーが訪ねてくる。彼女はオニールの転勤命令は、ムーアと自分の父親の画策だと思込む。自分宛ての書きかけの手紙の内容を問うセスイリーにオニールはついに愛を告白し、セスイリーもそれに応えて、二人は抱擁を交わす。

ムーアが突然戻り、セスイリーの父親が待っていること、彼の領地の没収命令書が当局から届いたことを知らせる。すぐさま父親が登場し、土地家屋すべてを失った、と悄然と語り、立ち去る。父をこのまま見捨てるわけにはいかないわ、とセスイリーは後を追う。

ムーアはオニールに、勇気をもってバリーナシーダに赴任せよ、と激励する。イナリが現れ、明日ダブリン経由で帰国すること、西部各州視察で得た印象として、政府が国民に土地を提供するのなら、統制と所有権を維持すべきである、と感想を述べて、「アイルランドの偉大な国務庁官吏ムーア様への感謝の思い出」と添え書きした小さな扇を贈り、辞去する。

オニールは「偉大な国務庁」どころか、我々が奉仕しているのは、屠場（a shambles）の床や壁で出来た「豚の社」（the Temple of the Pigs）だと吐き捨てる。しかし、ムーアは我々役人の仕事によって将来、その「豚の社」が「生ける神の社」（A Temple of the Living God）になるかも知れない、とためらいがちに反論する。その矢先に、戸外の広場で拳銃の乱射音が響く。どっちが本当なんだろうか、とオニールは冷酷な笑みを浮かべてムーアに尋ねる。幕。

第3幕 約12年後。老け込んだムーアが肘掛け椅子でうたた寝をしている。マーティンがホテル支配人ムーニー（Mooney）のサービスの祝い酒を持参する。今日はムーアが視察官を退職する日で、マーティンは引出しに残されたドウランの住居図面やネヴィン山の薔薇園の絵葉書、古地図、そしてムーアの日記帳などを取り出す。65歳の定年を2年特別に延長して貰いこの地区の業務をムーアは完遂したらしい。12年前の日記を拾い読みするうちに、彼はバリーナシーダに赴任させたオニールが現地から逃走し、懲戒処分を受けたのち復職したくぐりに目を奪われる。

モクラーがモリスィー夫人を伴って、離任するムーアに^{おぎら}勞いの挨拶に来る。遅れてやってきた30歳ぐらゐの末息子マイケル（Michael Morrisey）は、ムーアの職務を批判する投書をダブリンの委員会本部に寄せるなど

根強い反感を露わにし、後任者以外に挨拶する必要はない、と無礼にも立ち去る。モクラーと夫人は、若者のたわごとにすぎないと、取り成し、過去の経緯を詫げる。

やはり老けて腰の曲がったカーニーが来訪。薔薇園の絵葉書を見つけて往事を思い出す。12年前の暴徒の銃撃（第2幕の終わり）で左腕を失ったドウランが登場。彼に追加で割当てられたネヴィン山の土地がかつては墓地で、今日邂逅したセスイリーがその土地の返還を申し出ているのだと告げる。7年前に屋敷は解体され、その跡地で彼女は泣いていたのだという。ムーアが地図を探し出して確認したところ、墓地は最終的には留保事項とならぬまま、ドウランの所有地になっている。

ムーアとカーニーが階下へ降りると入れ違いにオニールが到着。ドウランは彼と12年前と同じやりとりを交わす。階下からムーアの退職を祝う歌声が聞こえてくる。

新採用の視察官で、ツイード服の青年ウォーターズリー（Philip Watersley）が登場。ゴルフ道具を運搬してきたマーティンはオニールと久闊を叙し、移住民代表として別れの挨拶をさせるためにドウランを階下へ案内する。「蛍の光」の合唱が聞こえてくる。

ウォーターズリーはダブリンから列車で5時間もかかるこの僻地を憂い、退職するムーアはしごき屋の鬼軍曹タイプ（a Tartar）で、女に現を抜かした拳銃捨てられた馬鹿な部下がいた、といった噂話を、目の前にいるのがご本人とは知らずにオニールに語る。彼はゴルフやドライ・フライ（毛鉤の釣）が趣味で、仕事よりは余暇に関心がある様子。

ウォーターズリーが直参してきた書簡をムーアがオニールに届けに来る。ムーアの後任者に任命する旨の正式通達である。バリーナシダ勤務を終えた者がこの任にあたるのがこれまでの慣例だとムーアは初めて明かす。そしてバリントンが臨終の床にあり、ネヴィン山の墓所での埋葬を希望しているので、土地の返還に便宜を図ってほしいと願い出る。かつて4万エーカーと900人の小作人を擁した大地主がいまでは僅かな墓所の返還さえままならない。思えばドウランは、2度橋頭堡の土地を提供した——最初は生ける者のために、2度目は故人となるバリントンが先祖と再会できるように——とムーアは補足する。

カーニーが登場し、オニールの昇進を祝う。酔っ払ったモクラーが、土地新法成立までドウランがアダゲールの土地を手放さずに待っていれば、いまよりもっと大規模な土地が手に入ったのに、と先見の明のなさを大笑いする。彼はまた、下戸のウォーターズリーに酒を勧めて、彼の趣味がゴルフや釣りだと聞くと大げさに驚いてからかう。ドウランは怒りながらもモクラーの挑発には乗らず、ムーアのこれまでの尽力に謝意を述べて、退場。

出発を告げるバスのクラクションが鳴り響き、ムーアは別れを告げる。立ち去り際に、イナリの置き土産の扇を手にとって眺め、元に戻す。再び「蛍の光」の合唱が聞こえ、バスの発車音がする。

ウォーターズリーが早速バター練習を始めると、セスイリーが来訪。かつて自分が出した薔薇園の絵葉書を手にとって思わず涙ぐむ。彼女はいったん没収された土地の返還はむづかしいだろうか、土地分割の作業は延々といつまで続くものなのか、と新任早々の青年に問いかける。

ムーアを駅まで見送ったオニールが戻り、セスイリーとの12年ぶりの再会を果たす。オニールは許可書に彼女の署名を求め、既婚者と知って驚き、夫の姓名も記入させる。セスイリーは自分が出した絵葉書を貰っているか、と尋ね、オニールは許可する。彼はムーアの後任者に着任したこと、自分の職務が正しいと信じている、と告げて、自室に引き下がる。セスイリーは再訪の意思と謝意をウォーターズリーに託す。

ウォーターズリーは突然、預かっていた重要書類があったのを思い出し、オニールに知らせる。明日午前10時にフィッツゴーマンズタウンでの現地視察の指示書で、慌てて二人は図面と別表の突合せの作業にとりかかる。オニールが読み上げ、ウォーターズリーが確認する作業がしばらく続いた後、オニールはぼんやりと虚空を凝視している。ふと目の前の椅子にムーアがいるような気がしたのだと彼は答える。幕。

実際に土地収用委員会²⁴に40年以上も勤務したメインの実体験がそのまま反映された作品であろう。地主階級から領地を没収し、それを分割して大勢の小作農を創設する一方、開発に必

要な用地取得のために立ち退きを迫り、別の移住先の土地をその代償にあてるという業務がテキストでは扱われている。このために、地主に長年にわたって仕えてきた地元の使用人が土地を分配されず、まったくの余所者があらたに村に引っ越してくるという事態が生じ、共同体に軋轢や不和をまねく要因となっていたことがわかる。

国家あるいは政府の方針に従って淡々とかつ生真面目に業務を進めて行く管理職官僚のムーアと、その非情さに反発を覚えながらも徐々に使命感に目覚めていく青年オニールの対比が見事に描かれている。公務員とその職務遂行の過程が主人公と主題となる、稀有な作品でもあろう。

また、見逃せないのが、ほとんど単語の羅列のようなプロウクンな英語で喋る日本人の国会議員イナリ存在であろう。これもまた、メインの14年間の日本在住経験があっただけで造形可能な登場人物である。東洋人の彼の頭に浮かぶ素朴な疑問や感想が、激しい土地闘争の主題を緩和させ、別の視点を提供するのに役立っている。ただし、土産の扇（あるいは絵葉書）などの小道具類は舞台劇ではあまり印象的ではなく、大寫しのきくテレビ・ドラマや映画向きの素材の印象がある。

12年が経過した第3幕は、どうしてもそれまでの後日談めいた微温的な情感に溢れ、展開の緊張感に乏しいくらいはあるが、すでにセスイリーを心の中で葬り去って仕事一筋に打ち込んできたオニールの心を掻き乱すまでには至らない点はしみじみとした哀感が漂っている。

おわりに

簡単にラザフォード・メインの7作品を振り返っておこう。デビュー作の『道の曲がり角』は、勤勉を是とするアルスター農民の労働倫理と芸術（音楽）を志向する若者の葛藤を描いた作品で、息子の帰還を期待して開かれた扉は、固陋な父親の心の扉の象徴でもあろう。『のらくら者』においても、勤勉・節約の美德を代表するセアラよりも、自称発明家の無能でぐうたらなダニエルが最後には気転をきかせて勝利を収める点で、労働至上主義を揶揄する狙いが顕著である。しかしながら、『誓約』になると、地主と小作人という階級闘争、プロテスタントとカトリックの融和という深刻な主題が、強制退去の史実を背景にずっしりと重く掘り下げられている。同様の重い主題は『赤い泥炭』にも引き継がれ、凶面という証拠や法によって権利を不当にも侵害された者の憤怒が、屈辱を受けた男の面子と相俟って、弱気な夫を凶行へと駆り立てる様を描いている。『幻影』は反戦主張が託された不思議な印象の歴史劇であり、最後の場面での若い世代の愛の凱歌に作者の主張が込められている。1930年代に発表された後期の2作品『ピーター』と『橋頭堡』には、メインの経歴が色濃く反映されている。前者は卒業を

控えた工学部学生の不安がもたらした夢物語であり、将来の進路を主体的に選び取ることの大事さを訴える点では『道の曲がり角』の同工異曲の面がある。後者は土地収用視察官メインの長年のキャリアと日本育ちの経歴なくしては成立しえない作品であり、土地への執着と公平な分割の困難さを、日本人を含む多彩な人物を配して提示している。

テキスト

Wolfgang Zach (ed.), *Selected Plays of Rutherford Mayne: Irish Drama Selections 13* (Gerrards Cross, Bucks.: Colin Smythe, 2000).

松居松葉（真玄）『松葉脚本集』（東京市：菊屋出版部，1915〔大正4〕年）

参考文献

Robert Hogan (ed.), *The Macmillan Dictionary of Irish Literature* (London: Macmillan Press, 1980), pp.445-446.

Ophelia Byrne, *State of Play: The Theatre and Cultural Identity in 20th Century Ulster* (Belfast: The Linen Hall Library, 2004), pp.14-17.

Margaret McHenry, *The Ulster Theatre in Ireland* (Philadelphia: University of Pennsylvania, 1931).（博士学位申請論文）

小嶋千明「翻案の力と演劇の改革—松居松葉とアイルランド演劇」、『比較文学』（日本比較文学会）第47巻，2004年，pp.7-22.

註

- ¹ このベン・ネームは、年齢のもっとも近い2人兄弟のそれぞれ2番目の洗礼名を合わせたものだという。テキスト，p.x.
- ² グレイス・プランケット（Grace Plunkett）が描く、ブルータス・ジョウンズ役のメインの戯画の説明文では、彼の役者としての技量は劇作ほどは称賛されなかった（His acting was less admired.）と記されている。Christopher Fitz-Simon, *The Abbey Theatre: Ireland's National Theatre: the first 100 years* (London: Thames & Hudson, 2003), p.55.
- ³ 別の芸名スイヴィーン・キャンマー（Seveen Canmer）も名乗り、結婚後はジョウゼフィーン・メインを用いている。アーヴィン（St. John Greer Ervine, 1883-1971）の『船』（*The Ship*, 1924）では夫婦でサーロウ（Thurlow）夫妻役を演じている。
- ⁴ 16世紀から18世紀にかけてイタリア北部の都市クレモナにおいて、ストラディヴァリ家、ゲルネリ家、アマティ家などが製作したヴァイオリンの名器。
- ⁵ 新約聖書の『エペソ人への手紙』4章26節より。
- ⁶ Robert Hogan and Michael J. O'Neill (eds.), *Joseph Holloway's Abbey Theatre: A Selection from His Unpublished Journal* (Carbondale and Edwardsville: Southern University Press, 1967), p.91.
- ⁷ ベルナルド・パリスイ（Bernard Palissy, 1510-89）は、動植物の装飾を施した田園風陶器で有名。
- ⁸ ヘブライ語で「助けの石」を意味する。旧約聖書の『サムエル記 上』7章12節に「サムエルは石を一つ取ってミツバとシェンの間に置き、「今まで、主は我々を助けてくださった」と言って、それをエベン・エゼル（助けの石）と名付けた。」とある。聖書にちなむ敬虔な名前であると同時に、殺人を犯しながらも逮捕を免れた点では、たしかに主から助けられる幸運に恵まれていたとも言える。

- 9 「出血性の発疹を伴う熱病」で、たとえば「発疹チフス」など。『リーダーズ・プラス英和辞典』による。
- 10 映画『パラダイス ナウ』(Paradise Now, 2005)には、爆弾を体に装着して自爆テロ攻撃へと向かう二人のパレスティナ青年サイドとハーレドが登場する。どちらが先に自爆するかと訊かれて二人とも同時に名乗りを上げ、コイン投げで裏を選んだハーレドが第1自爆者に決まる場面がある。みずからの生命を賭して殺害に向かう2人の男たちがその運命を決めるのに、『誓約』と同様に、コインという単純な道具を用いていることは興味深い。命がけの重要な決定にもかかわらず、否、重要な決定であるからこそ、単純なルールが好まれるのだろう。(映画プログラム『パラダイス ナウ』, アップリンク, 2007年, 採録字幕 p. 50を参照。)
- 11 P.B. エリス (堀越^{とも}智・岩見寿子 訳)『アイルランド史 上 民族と階級』(論創社, 1991年), p.191. [原著名 P. Berresford Ellis, *A History of the Irish Working Class*, 1972/85.]
- 12 *Joseph Holloway's Abbey Theatre*, p.127.
- 13 ゴールウェイの東21キロにある町。州道347号と348号の交差点。ジャガイモ飢饉を題材とした反抗歌「アスライの草原」(“The Fields of Athenry”)で有名。この曲は映画『ヴェロニカ・ゲリン』の終末部で11歳の少年の独唱で歌われている。
- 14 Diarmaid Ó Muirthe, *A Dictionary of Anglo-Irish: Words and Phrases from Gaelic in the English of Ireland* (Blackrock, Co.Dublin: Four Courts Press, 1996), p.153 には見出し語‘práta’として挙げられている。
- 15 *Joseph Holloway's Abbey Theatre*, p.150.
- 16 Rutherford Mayne, “A Prologue”, *The Dublin Magazine*, 2 (June, 1925), pp.723-725.
- 17 普通名詞としての意味は「醜い老婆」「鬼婆」が多いと思われるが、「魔女」, 「悪霊」「お化け」の意味もある。ここでは固有名詞的に解釈してカタカナ書きとした。
- 18 足枷をつけて強制労働をさせられている訳でもないのに、「無償で働かされる男」「使用人」程度が適切かも知れない。
- 19 テキストのト書きでは最初に「リュートを拵えた」(he has made a lute [117])と説明され、終盤のト書きもでは「ダノンのリュートの調べ」(*The sound of DANON'S lute* [126]), 台詞にも「リュート弾き」(the lute player [123])として出てくるので、ダノンはリュートを奏でているのだと思われるが、ここではフルートの演奏なのだろう。リュートは琵琶に似た弦楽器であり、管楽器フルートとは別物のはずである。
- 20 『ルカによる福音書』16章19-31節
- 21 「より高く」を意味するラテン語。ニュー・ヨーク州の標語でもある。
- 22 どちらが姓であるのかもはっきりしないが、イナリは「稻荷」からメインが思い付いた名前である。油揚げやいなり寿司ではなく、「キツネ」の意味で「稻荷」を用いていることはテキストでメインが明示している通り。もちろん、イナリの音に合う人名としては他に「飯生」「居也」「伊也」「井成」「稻留」「伊禮」などが考えられるのだが。もう一つの名前はゴスキとローマ字読みすれば「碁好き」、ゴウスキと読ませれば「豪助」「剛介」「郷輔」などの名前とも解釈できる。sake (酒)をサキと英語圏の人は発音することもあるので、スケがスキに転訛した可能性がある。なお、下僕はこの名前をロシアの騎馬兵コサックと覚え違いして、Mr Cossacks [199] と呼びかけている。
- 23 映画『遙かなる大地へ』(Far and Away, 1992)では、父親の敵討ちに行く息子に、暗殺団の合言葉として伝えられている。
- 24 高度に専門的な内容なので、注記の形でこの委員会の機能についての文章をまとめて引用しておく。アイルランド自由国成立後にできた「1923年法は、自由国の領域内において土地購入を完成させ、稠密問題に救済を与えることを目的としていた。そのため、①残存するすべての農業小作地、稠密地方内のすべての非小作地、稠密地方外であっても稠密救済に必要と看做される非小作地、以上の土地は、「土地委員会」の指定する日時を期して、当該委員会に帰属すべきであった。他方、「土地委員会」は、それらの土地の所有権を、年賦金支払いを条件に、可能なかぎり急速に農民に帰属させる。ただし、「委員会」は、稠密地方の保有地の拡張ないし改良のために利用しうる土地面積を、「委員会」の判断で保持することが出来る。②本法施行の後には、小作地が「土地委員会」に取用される以前であっても、小作農の地主に対する地代支払いは停止さ

れる。購入価格が決定し、保有地の所有権が小作農土地購入者に帰属するまで、小作農は、以前の地代よりも25%低い金額を「土地委員会」に支払う。「委員会」は、徴収手数料と税を控除し、残額を地主に交付する。③1920年以前に累積された滞納地代は、すべて帳消しにされ、1920-1923年間の滞納地代は、25%だけ削減される。これらの削減された滞納額は、「土地委員会」によって徴収され、徴収費用と所得税が控除された後、地主に交付される。これらの諸規定によって、アイルランド自由国における地主・小作関係は、事実上廃絶されたといえよう。「土地委員会」が過渡的な地主となるのである。④地主に対する土地価格の支払いは、4.5%利付のアイルランド自由国土地購入債権でなされる。他方、小作農土地購入者は、その代価を毎年4.75%づつ、65年6カ月にわたって返済する。——高橋純一『アイルランド土地政策史』（社会評論社、1997年）、pp.193-194。（挿入英文を一部省略。下線は引用者による。）